



TITLE:

人文 第62号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第62号. 人文 2015, 62: 1-51

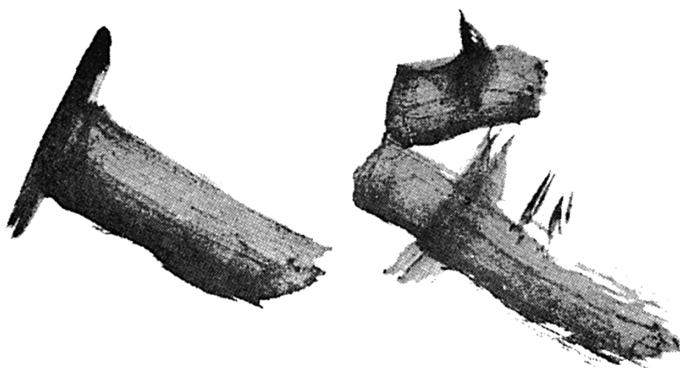
ISSUE DATE:

2015-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/204217>

RIGHT:



第六二号



2015

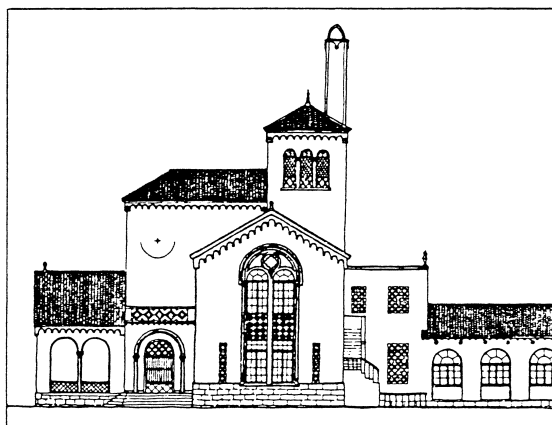
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第六二号

2014年4月—2015年3月

も く じ



随想	1
たぬきそば	金 文京
講演	5
夏期公開講座「名作再読—いま読んだらこんなに面白い(8)」	5
絶滅と創造の想像力	瀬戸口明久
くずし字で読む朝鮮の歴史	矢木 毅
周公の祈り—書経・金縢	浅原 達郎
講演会ポスターギャラリー二〇一四	12
彙報	16
共同研究の話題	20
第一次世界大戦研究から「現代・世界」への問いかけ	山室 信一
所のうち・そと	24
アフガニスタンの地図	稲葉 稔
二つのレクイエム	小関 隆
春歌としての文化相対主義	田中 雅一
白と黒のエチュード——「クビライの動物園」より	宮 紀子
Uボートに乗って	宮宅 潔
書いたもの一覧	38

たぬきそば

金 文 京

今年の春、京大を退職して二十二年ぶりに関東にもどって来たので、以前、東京にいたころよく行っていた蕎麦屋に顔を出してみた。するとこちら同様、相応に老けた店の亭主が私の顔を覚えていてくれたのには驚いた。しかしよくよく話を聞いてみると、毎日同じものばかり食べる客だったからだと言うのである。そう言われて、ほとんど毎日、昼はこの店でたぬきそばを食べていた、と思いだした。

念のために説明しておく、東京のたぬきそばというのは、天カスを載せた汁そばのことである。といっても、それようにわざわざ揚げた丸く粒のそろったもの、大阪ではこれを載せたうどんをなぜかハイカラと言うようだが、そんなこざっぱりしたのではなく、天麩羅を揚げた時にでる大小不一、形もさまざまにふぞろいの本物の天カスである。値段はきつねと同じで、かけ、もりの次に安い。蕎麦屋にしてみれば、これは天麩羅を揚げれば自ずと出てくるもので、ただ同然、現に最近では鉢に盛っていくだけでも食べさせる店もあるぐらいだから、それがか



けより高く、きつねと同じ値段なのは、たぶん名前のせいだろう。ともかく油揚げの載ったきつねに比べれば、たぬきは大人に見劣りするわけで、これを食べる客もそんなに多いとは思えない。そのあまりばつとしないたぬきを毎日注文していたのだから、顔を覚えられたのもやむをえないだろう。

私はこのたぬきそばがめつぼう好物であったが、京都に来てからは当然、食べられなくなつた。だいたい京都のそばは色が黒く腰がゆるいので、そば自体をあまり食べなくなつたと言つてよい。ところが間もなく京都にもたぬきそばがあることに気がついた。京都のたぬきは、油揚げのきざみと青ネギをあんかけにしたものである。あんかけにすると麺に腰がないのが気にならず具合がよい。最近あまりなくなつたが、京都独特の雪の降る底冷えの寒い夜、これを食べると芯から暖まる。というわけで、京都のたぬきもすっかり気に入つてしまい、毎日ではないがよく食べた。大学の食堂でも冬にはキザミアンカケという名前で出たが、そういう時は毎日食べたので、こちらでも顔を覚えられたかもしれない。

たぬきは大阪にもあるが、これはきつねそばのことである。大阪ではきつねうどん、たぬきはそばと決まつていて、つまりきつねそばとたぬきうどんはない。ある時、心斎橋近くの蕎麦屋で、品書さに、きつねうどん、たぬきそばとあったので、うどん、そばは不要ではないかと主人に言つたところ、ケツタイな客やという顔でにらまれた。大坂のきつねうどんは有名だ



が、私はたぬきびいきなので、そばの方がうまいと思う。それはともかく、きつねは化けないのに、たぬきは化けるところが妙である。

あるいは、京都や大阪の油揚げのたぬきはともかく、東京の天カスごときの、どこかそんなにうまいのか、と疑問に思う人もいるだろう。そう言われると実はこまるのであって、正直に言ってしまうと、本当の好物は天麩羅そばなのである。しかし東京の天麩羅そばは、とびきり高い。どうかするとたぬきの三倍以上はする。したがってそうめったには食べられないのであって、天麩羅そばが食べたいが、まあいいや、カスでがまんしておこう、ということにいきおいならざるをえない。なんともみみっちい話だが、このみみっちさが、どうやら私の性には合っているらしい。まあこれでいいや、天麩羅はまた今度にしよう、と思う時の残念でありながら、どこかほっとするような、あるいは将来に淡い期待をつなぐような心持が私は好きである。あるいは毎日食べているうちに習い性となってしまうたのかもしれない。

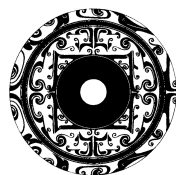
振り返ってみると、私のこれまでの人生は、たいていはこのまあいいや流でやってきたような気がする。職業柄、論文などをずいぶんと書いたが、どれも書いている途中で嫌気がさすか飽きが来てしまい、まあこれでいいや、ちゃんとしたのはまた今度書けばよろしい、というような代物ばかり、まったくもって慚愧にたえないというやつである。しかしもう四十年近くこ



れでやってきて、すでに齡六十を越えたとなつては、今さら変えることも難しいだろう。そもそもこの世に、また今度というのはないのである。先日テレビを見ていたら、どこかの田舎のおばあさんが、「今度とお化けは見たことがない」と言っていたが、けだし名言、いっそのこと開き直って、なんでも適当にやるたぬきおやじ、いや、そのうえ場所によつて自在に化けるたぬきそばおやじになつてやろうか、などと愚にもつかないことを考えながら、今日もたぬきそばに腹鼓をうっている。



講演



夏期公開講座

絶滅と創造の想像力

瀬戸口 明久

ハラルト・シュテュンプケ『鼻行類』は、二〇世紀半ばに発見された哺乳類の一群に関する研究書である。一九四一年、日本軍の捕虜収容所から脱走したスウェーデン人が、南海に浮かぶハイアイアイ群島に漂着した。そこで発見されたのが、鼻を足のように使って歩行する哺乳類、鼻行類である。これまでに記載された鼻行類は一四科一八九種。その形態と生態は驚くべき

多様性を持つている。地中にトンネルを掘って生活するモグラハナアルキ。鼻を使って飛行するダンボハナアルキ。花に擬態して昆虫を捕食するフシギハナモドキ。これらの奇妙な動物たちは、いまだではもう存在しない。核実験によってハイアイアイ群島は海底に沈み、すべての鼻行類は絶滅した。残されたのは本書の原稿だけである。

本書は、著者シュテュンプケに資料を託された動物学者ゲロルフ・シュタイナーによって一九六一年に出版された。これまでドイツ語原書からフランス語、英語、日本語、イタリア語に翻訳されている。それにもかかわらず、本書は名作とされるべきか評価が分かれている著作である。まず巻末の詳細な文献一覧に記載されている論文の大部分は実在しない。著者のシュテュンプケも存在せず、実際の執筆者はシュタイナーである。そしておそらく、鼻行類そのものも実在したことはない。つまり本書の記述はすべて想像の産物なのである。だが本書は、SFや幻想文学のカテゴリーに入れられるべき著作ではない。あまりに標準的な博物学のスタイルで記述されているからである。科学者たちは、本書を進化生物学の視点から解釈しようとした。あるいは核実験を揶揄する寓話として読む者もいる。だが本書の叙述は、そこから何らかのメッセージを読み取

るにはあまりにも断片的である。そこでは鼻行類の奇妙な生態についての記述が、ひたすら淡々と続いている。そこにどのような意味づけを与えてみても、何かしっくりしない感覚が残される。それにもかかわらず、存在しえたかもしれない、しかし存在しなかった生き物たちは、読む者に強烈な印象を残す。

二〇一四年一月、理化学研究所の女性研究者らが、マウスの体細胞に酸性溶液で刺激を与えると、さまざまな細胞に分化する多能性が獲得されたという研究成果を発表した。こうして作成されたSTAP細胞は、革新的な生命科学の発見として大きな注目を浴びることになる。だがしばらくすると捏造が疑われる不備が次々と指摘されはじめ、ついにはSTAP細胞の存在にも疑問が付されるようになった。

ここで考えたいのは、捏造という研究不正の問題ではない。むしろ注目すべきは、科学研究が意味を過剰に増殖させる構造を持っているということだ。現代の科学研究は、外部からの資源の投入によって維持されている知識生産システムである。そこには公的な資金が投入され、続々と新たな研究者が参入し、毎日のように大量の論文が生み出されていく。こうしたシステムを維持するため、科学研究はつねに自らの意味を創り出し続けなければならない。STAP細胞も、医療

への応用や日本の科学技術の発展、さらには女性科学者の活躍といった、さまざまな意味を帯びながら社会へと送り出されたのである。

こうして創出された意味が固定化されると、科学研究は空回りしながら前進する自動機械になる。その中で科学者たちは、システムを維持することに腐心することになる。ときには過剰な意味に引きずられ、嘘を事実のように提示する者も出てくる。このような科学者は逸脱者として直ちに厳正に処罰され、システムの外部へと追いやられる。こうして嘘はなかったことのように忘れ去られ、再び知識生産システムは回りはじめる。そして科学研究に貼り付けられた陳腐な意味は、以前と変わらぬまま残されるのである。

だがときに、社会を維持するシステムが崩れ去り、すべての意味が失われてしまうことがある。「鼻行類」は、そのような混沌の中から生まれた物語である。その誕生を語るインタビューの中で、シュタイナーは第二次大戦直後に住んでいたダムシュタットの様子を長々と説明しはじめる。空襲で街の大部分は破壊され、勤務していた工科大学も閉鎖されたこと。毎日の食事も満足に得られず、カタツムリや野草を食料としていたこと。そのような状況では、「何もかもが新しく、そこには定まった見解とか、承認された見方というも

のはなかった」という。

そんな中で出講したハイデルベルグ大学で、初めて「鼻行類」が公開される。学生たちはすぐにそれが嘘であることに気づいた。しかしその後が続いたのは、鼻行類の進化をめぐる熱心な議論であった。そのときの学生のことを、シュタイナーは以下のように回想している。「彼らは何年ものあいだ思うままに操られ、自分自身の意見を持つことが許されなかった人たちでした。……彼らに対しては、嘘をもっともらしく話して聞かせることなど少しもできませんでした」（カール・ゲーステ『シュテュンペケ氏の鼻行類』）。

私たちが生きている世界は、一つ一つの出来事に意味が与えられることによって秩序が保たれている。科学研究もまた、単に知識を生産して蓄積しているのではなく、意味の編み目の中で行われる人間の営みである。そこで意味が増殖するとき、科学者はシステムを維持するために突き動かされる部品となる。しかし世界の秩序が崩れ去り、それを支えていた意味が陳腐な虚構にしか見えなくなる瞬間がある。そのことに気づいたとき、あらゆる意味づけを拒絶する突き抜けた想像力が生み出されるのである。

くずし字で読む朝鮮の歴史

矢 木 毅

木村理右衛門『朝鮮物語』のことは、多くの名作と同様、その令名を知るばかりで長らく読むこともなかった。昭和四十五年、京都大学文学部国語学国文学研究室から立派な影印本が刊行されていたながら、そうしてその京都大学で朝鮮の歴史を学んでいたながら、この作品に対してほとんど食指を動かすこともなかったのは、どうせ江戸時代の日本人による類型的な歴史が描かれていたにすぎないという思い込み——今にして思えば単なる無知——によるところが大きい。自分は『三国史記』、『高麗史』、『朝鮮王朝実録』などの一次史料に依拠して歴史を研究しているのであるから、いまさら「和臭」の強い日本史料などは読む必要はない……などと強がってもいたのであるが、それも結局のところは負け惜しみで、要は「くずし字」が読めないために、読みたくても読めないという、ただそれだけのことにすぎなかった。

ところが研究を進めていくうちに、やはり「読めな

い」では済まないということが段々にわかってくる。授業では朝鮮史全般を扱うという建前となっているため、だいたい五年くらいのサイクルで古代史から近代史までいろいろな史料を学生たちと読んでいるのであるが、近代史に入ると、それこそ漢文だけでは追いつかずに欧米人の残した横文字の文献にも一応目を通さなければならぬ。中国が開国し、日本が開国するなかで、かたくなに鎖国・攘夷の政策を取り続けた当時の朝鮮国のことを、欧米人は「隠者の国」、「禁断の国」などと称して何とかその内情を探ろうとしていた。その際、まず手がかりとなるのは中国経由の漢文史料による情報であり、今一つは日本経由の和文による情報である。欧米人の残した著作の参考文献リストには、たいてい木村理右衛門『朝鮮物語』の名前があげられていることに気が付いた私は、いままさながら、この書物にまともに向き合わざるを得なくなっていることを悟った。

しかし問題は例の「くずし字」である。もともと、それを持ち越えがたい壁のように考えるのは、ある意味では私たちの余計な思い過ごしで、実際の『朝鮮物語』は漢字仮名交じりの極めて平易な文章であり、しかも漢字にはすべてルビが振られている。変体仮名は確かに厄介であるが、明治初年まではむしろそちらの

方が標準の仮名遣いであつたわけであるから、なにも特別な文章というわけではない。跋文に述べるとおり、「児童の物語の助けにもなれかし」と至って親切に作られた本であるから、これを「読めない」などと言っているのは、かえって罰が当たるといふものであろう。

まずは「習うより慣れよ」と自らを励ましつつ、くずし字の辞典を片手にそろそろと読み進めていくと、幸い書かれている内容の見当はついているので、だんだんと読めるようになってくる。ミミズのたぐったような線がだんだん意味をもった文章として目に飛び込んでくるようになると、それはそれでやはり純粋に楽しい。

こうして読み進めた『朝鮮物語』の内容は、実はシーボルトの『日本』——これも令名を知るのみで、かつて手に取ることもなかった本の一つ——に、ほとんどまるまる紹介されているし、また園田一亀著『韃靼漂流記』（平凡社東洋文庫）——こちらは学生時代に刊行されてすぐに読んだ記憶がある——にもちゃんと紹介されているのであった。

先に述べたとおり、欧米人の著作の参考文献リストには、たいてい木村理右衛門『朝鮮物語』の名前があげられているが、それは恐らく、シーボルト『日本』からの「孫引き」といったほうが実態としては近いの

であろう。『韃靼漂流記』に紹介されている『朝鮮物語』の内容もあらかた忘れていた私は、逆にから欧米人の著作から『朝鮮物語』の存在を再認識、その縁でシーボルトの『日本』にもようやくたどり着くことができたというわけである。

『日本』における朝鮮記事の圧巻は、なんといっても、そのころ長崎に居留していた朝鮮漂流民たちとのインタビュー記事で、同書の写実的な挿絵は記事の内容に一層の興味を添えている。シーボルトが面会した金致潤・許士瞻という二人の朝鮮知識人は、それぞれに「漢詩」を賦して異邦人との邂逅の記念としているが、その「漢詩」なるものはシーボルトの目からみても実に下手くそな代物で、かれは「これらの詩の作者は自分が詩人だとは思っていないだろう。彼らの詩句を中国の七言絶句に似せることで満足しているのだろう」と評している。しかし、「彼らのふるまい全体ににじみ出ている、そしてこういう詩で自分をほのぼのと語る真率な心根は、この国民について、これまで邪推と脅迫でその海岸と国境から外国人を追いつけてきた国民というイメージよりよほど好感のもてるイメージをわれわれに抱かせるものである」とも語っている（シーボルト『日本』第五卷、一二六頁）。

「漂流」という偶発事から生み出された異文化との

出会い——『朝鮮物語』に描かれている越前三国の商民たちの漂流譚にしても、そこには今日の私たちをも引き付けてやまないさまざまな魅力が満ち溢れている。そうしてその魅力の根底にあるのは、同じ人間どうしとしての信頼と友情の感覚であろう。

とはいえ、その同じ人間どうしが、さまざまな要因によってまったく異なる国家・社会を形成し、それぞれの国家・社会が対立を繰り返してきたこともまた一つの厳然たる事実である。そうした差違・対立の由来はどこにあるか——当日の講演は、例によってこの肝心の主題にたどり着いたところで尻切れトンボに終わってしまった。その答えを得ることは容易ではないが、「くずし字」に対するアレルギーを治療していきたいと思う。

周公の祈り

——書経・金縢

浅原達郎

わが「中国古代の基礎史料」班で、清華大学所蔵戰国竹簡（清華簡）の金縢を読んでいたのは、二〇一三年の六月から七月にかけてのことだが、その過程で、書経の金縢との大きな違いのあることに気づいた。書経・金縢では、周公の祈祷の翌日に武王の病気が良くなったことになっているのだが、清華簡・金縢では、そこがすっぽり抜け落ちていて、つまり、周公の祈祷の効果はなく、武王はそのまま死んでしまうのである。このことは、復旦大学の陳劍氏がすでに注意していて、われわれが第一発見者ではない。たしかに、武王の病気が良くならなかったとすると、つじつまの合うところがいくつかあるので、やはり陳劍氏が言うように、清華簡・金縢が先にあつて、書経・金縢はそこに手を加えたもののなのだろう。しかし、そうなると、清華簡・金縢は、書経・金縢とはまったく違った話になる。周公を賛美しているはずはないし、いったいなにが言

いたいのだろうか。まったくあらたにストーリーを読みなおさなければならぬのである。

あらたなストーリーを考えるうえでの手がかりは、清華簡・金縢に「金縢」の標題はなく、最後の竹簡の裏に「周武王有疾周公所以代王之志」と書いてあることである。「周の武王が病気になる、周公が自らの代わりになろうとしたときの意図」と読める。だから、周公はどういうつもりで効果のない祈祷をしたのか、というところがポイントなのだが、清華簡・金縢を読んでも、それがはっきりわかるようには書かれていない。推測は可能だが、なにも証拠は無い。根拠の無い勝手な推測は、空想であつて学術研究ではない。しかしそこを考えなければ、清華簡・金縢を読んだことにはならない。それになにより、気持ちがおさまらない。

こういう場合は居直つてしまえと、学術研究のこだわりを捨てて、フィクションの形式で自分の空想を文字にしてみることにした。それが「八一山人」名義の創作小話「金縢」で、二〇一四年の一月に書き上げた。戦国竹書を読んでいてこの手に出たのは、これが初めてではなく、恥ずかしながら四作目である。そんなおり、二〇一四年七月の夏期講座「名作再読」の依頼を受けた。「いま読んだらこんなに面白い」というのが、

このシリーズのキャッチフレーズであるという。

依頼は受けたものの、清華簡・金匱を読むのでは「名作再読」にならないので、やむなく書経・金匱の方を表に出した。しかし読んでおもしろいのは清華簡・金匱の方なので、それを暗に示す「周公の祈り」という題目をさらにその上にかけた。けがの功名なのだが、対象を書経・金匱にしたのは正解であつたと思う。というのは、清華簡・金匱のおもしろさを語るには、おそらく時間が足りない。講演の手順としてまずは、清華簡・金匱と書経・金匱の違いをていねいに説明しなければならぬのだが、そのためには金匱全体の話の流れをたどる必要もあり、それだけで与えられた時間の大半を費やしてしまうだろう。また、そこから先は空想をふくらますしかないのも、もはや学問ではない。いくら一般向けの夏期講座とはいっても、人文科学研究所の講演としてさすがにふさわしくないだろう。

そこで、配布プリントのほかに、創作小話「金匱」を印刷して別冊とし、当日、講演の始まる前に、受付の係りのかたにあずけた。そして、講演のなかでは、それでは周公の祈りの意図はなんだったのでしょうか、と気を持たせたあとで、しかし時間がないとか、学問じゃないとか、あくまできょうの主題は書経・金匱な

のだ、などと弁解して、それでも興味のあるかたはお帰りのさいに受付でどうぞ、と別冊を紹介して、その場を収めた。係りのかたにはよけいな手間をとらせてしまい申し訳なかったが、この奇策はわれながらうまくいったのではないかと思う。

そういうことで、ともかくおしまい。書経・金匱について締めくくらなければならない。武王の病気が良くなったこととしてある書経・金匱では、清華簡・金匱に本来あつたはずの、たぶんちよつとあやしげなおもしろさは、どこかへ行つてしまつていたのであり、まったくもって「いま読んだらこんなにつまらない」ものののだ。しかし、それでは講座の主旨に合わない。で、講演では、われわれがいま、古典などの伝世の書物で読んでいるもののなかには、そうした毒抜き保存処理されたものがあるのかもしれない、だから、ときには処理以前の生き生きとしたすがたを思いながら読んでやるべきなのかもしれない、そんなことを教えてくれる書経・金匱は、やはり「いま読んだらこんなに面白い」のだ、と無理矢理こじつけたのは、もとより窮余の策だが、あとから思えばこれはなかなか重要な視点であつた。

なお、八一山人の創作小話は、「金匱」をふくめて、インターネット上でひっそりと公開されている。

人類学研究所 2014 | レクチャー・シリーズ

精神分析対談・立木康介著

『露出せよ、と
現代文明は言う』
をめぐる

立木康介 × 十川幸司

2014
5/17(土)
18:00-20:00

京都大学人文科学研究所本館4階 会議室

入場：無料（入場券は不要）
定員：100名（先着順）
申込：5/17(土) 18:00-19:00 申込受付
申込先：京都大学人文科学研究所 事務局 TEL: 075-753-4242
E-mail: kusho@kusho.kyoto-u.ac.jp

五月

京都大学人文科学研究所
研究科「第一・近代学際研究」国際研究集会

READING THE ENEMY'S MIND
AN ALTERNATIVE HISTORY OF TWENTIETH-CENTURY JAPAN

Zachary Shore
Assistant Professor
Department of National Security Affairs
Naval Postgraduate School

11時～12時 4月16日(水) 12:30～13:20
会場：京都大学 人文科学研究所 1F セミナー室2
観覧自由：無料

主催：京都大学人文科学研究所国際研究科「第一・近代学際研究」

四月



講演会
ポスターギャラリー
二〇一四

2014 KYOTO LECTURES
Wednesday, May 21st, 18:00h

Diego Pellicchia SPEAKER

Beyond the Black and White
Amateurs and Professionals in the World of Noh Theatre

Diego Pellicchia holds a PhD in Theatre & Theatre Arts from the University of California, Berkeley. He has been working in the field of Noh theatre for over 10 years. He is currently a postdoctoral fellow at the Center for Japanese Studies, University of California, Berkeley. He has published several articles on Noh theatre and is currently working on a book titled 'Beyond the Black and White: Amateurs and Professionals in the World of Noh Theatre'.

The lecture will be held at the invitation of the Research in Humanities Center, Kyoto University.

Early Registration of Students: 17:00 - 18:00
Early Registration of Faculty: 18:00 - 18:30
Admission: Free (Donation: 500 Yen)
E-mail: kusho@kusho.kyoto-u.ac.jp

人類学研究所 2014 | レクチャー・シリーズ

詩・ハーモニー・アドリブ
— ジャズ・ヴォーカルを伴奏する —

フィリップ・ストレンジ
ステイヴ・ハスマン
岡田隼生

日時
2014年5月22日(木) 18:30-20:00

会場
定数会場(京都大学医学部内) 稲盛ホール

先着
200人
限定

連続合評会 レクチャー

第一次世界大戦を考える

4月26日(土) 11:00-12:00
会場：京都大学人文科学研究所
観覧自由（入場券）
入場券：500円

5月10日(土) 11:00-12:00
会場：京都大学人文科学研究所
観覧自由（入場券）
入場券：500円

5月24日(土) 11:00-12:00
会場：京都大学人文科学研究所
観覧自由（入場券）
入場券：500円

6月7日(土) 11:00-12:00
会場：京都大学人文科学研究所
観覧自由（入場券）
入場券：500円

6月28日(土) 11:00-12:00
会場：京都大学人文科学研究所
観覧自由（入場券）
入場券：500円

会場所
京大人文研本館・セミナー室1

主催
京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区
TEL: 075-753-4242

協賛
京都大学人文科学研究所 総務部
TEL: 075-753-4242
E-mail: kusho@kusho.kyoto-u.ac.jp

お問い合わせ
〒606-8501 京都府京都市左京区
TEL: 075-753-4242
E-mail: kusho@kusho.kyoto-u.ac.jp

無料・学費不要



京都大学文学部
「POURVU QUE ÇA DURE...」
政治・主体・現代思想

2015.12(月・祝)14:00-18:00
京都大学百年創立125周年記念事業 2F
国際学術センター

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

一月

International Conference
Kyoto LECTURES
Wednesday, December 3rd, 18:00h
SPEAKER
Joseph O'Leary
Moral and Ontological Paradox in the Teaching of Vimalakirti

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

十二月

2014年11月8日(土)
13時30分～17時30分
京都大学文学部人文科学研究科
本館4階 会議室

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

十一月

Kyoto 2015
International Conference of Dunhuang Studies in Kyoto 2015
敦煌學國際學術研討會

2015年11月20日(土) 9:30-18:30
21日(日) 9:30-17:00
京都大学百年創立125周年記念事業 2F
国際学術センター

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

International Conference
Asian Buddhist plural colonialisms and plural modernities
Workshop #3 -Kyoto
Dec. 12, 2014
Jinbunkan
Dec. 13-14, 2014
Hall, Seiwaku 3
Omika Campus
Kyoto University

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

大学とはなにか
2014年11月22日(土) 14:00-18:00
京都大学文学部人文科学研究科
本館1階 会議室

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

藤家郷博士
遺品展示会・講演会
東シニア近世の書籍・文化交流

日時：平成27年2月22日(日)午後1時～2時
場所：京都大学文学部人文科学研究科 北山荘大会議室

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

二月

International Conference
Kyoto LECTURES
Tuesday, December 16th, 18:00h
SPEAKER
Ran Zwigenberg
Survivors, the Holocaust, and the Rise of Global Memory Culture

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

A lecture by Professor K. Ramasubramanian of IIT Bombay
This year being the 50th anniversary of the founding of the IIT Bombay, the IIT Bombay would like to invite the distinguished Professor K. Ramasubramanian to give a lecture on the occasion of the 50th anniversary of the founding of the IIT Bombay.

京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科
京都大学文学部人文科学研究科

古く清玩
利他と徳のかたち
李のモノ・カネ
清玩のモノ・カネ

第19回 京都大学人文科学研究所 TOKYO 清遊 SEMINAR

清玩
— 文人のまなざし —

2015年3月16日(月)
15:00-17:00 (懇話会・聖甲虫会
会場/一橋大学一橋聖甲虫会館)

京都大学人文科学研究所 主催
京都大学文学部 協賛
京都大学文学部 協賛
京都大学文学部 協賛

台湾銀行資料データベース
臺灣銀行所蔵日活時期文書
公開記念ワークショップ

このたびは中央研究院台湾史研究所において、戦前戦中台湾の史料が豊富に
「臺灣銀行所蔵日活時期文書」として公開されました。
公開記念ワークショップでデータベース利用と史料活用について報告させていただきます。

日時 2015年3月7日(土) 10:30-17:00
場所 人文科学研究所4階大会議室

参加費 無料
申込 不要
申込先 人文科学研究所 4階大会議室
申込先 人文科学研究所 4階大会議室

主催 京都大学人文科学研究所、文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
協賛 京都大学文学部、文学部、文学部、文学部

特別講演会

Dirhams for Slaves, Furs and Amber
Islamic trade with Europe and the northern lands
in the 9th and 10th centuries

講演者: LUKE TREADWELL 博士 (オクスフォード大学)

日時: 2月18日 日本橋日宝寺5階より
会場: 京都大学文学部附属ユーラシア文化研究センター

Dr. LUKE TREADWELL is a historian and numismatist with expertise in the history of any thing to trade. He has been a member of the British Numismatic Society since 1990, and is a past president of the Society. He is also a past president of the British Numismatic Society. He is also a past president of the British Numismatic Society. He is also a past president of the British Numismatic Society.

富永茂樹 退職記念講演会
転位する観客
啓蒙と革命のあいだで

2015年3月10日(火)
15:00-17:00
京都大学文学部附属ユーラシア文化研究センター

富永茂樹 氏講演会
富永茂樹 氏講演会
富永茂樹 氏講演会



【記録映画】最後の吉原芸者
四代目みな子姐さん
吉原最後の証言記録 上映会・講演会

この映画は、三井物産の「吉原芸者」の記録映画。吉原の芸者、みな子姐さんの最後の証言を記録した。吉原の芸者、みな子姐さんの最後の証言を記録した。吉原の芸者、みな子姐さんの最後の証言を記録した。

上映会・講演会
上映会・講演会
上映会・講演会

彙報 〇二〇一四年四月より二〇一五年三月まで

おくりもの

- 井波陵一教授は第六六回読売文学賞研究・翻訳賞を受賞(二〇一五年二月二三日)。

訃報

- 松尾尊允名誉教授(八五歳)は、十二月十四日逝去。

人のうき

- 村上衛准教授(東方学研究部)は、附属現代中国研究センターに配置換(四月一日付)。
- 藤本幸夫は、客員教授(文化研究創生研究部門、四月一日〜二〇一五年三月三十一日)。
- JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一五年三月三十一日)。
- 武上真理子 人間文化研究機構地域研

究推進センター研究員は、客員准教授(附属現代中国研究センター、四月一日〜二〇一五年三月三十一日)。

- VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授(四月一日〜二〇一五年三月三十一日)。

HOLCA, Irina を講師(人文学研究部)に採用(十一月一日付)。

- 金文京教授(東方学研究部)は、退職(二〇一五年二月三十一日付)。

富永茂樹教授(人文学研究部)は、定年により退職(二〇一五年三月三十一日付)。

海外での研究活動

- 金文京教授(東方学研究部)は、二〇一四年三月十五日大阪発、北京大学中国語文学系に於いて連続講演及び中国文学関連資料収集を行い、四月十五日帰国。

大浦康介教授(人文学研究部)は、二〇一四年三月一日大阪発、パリ第三大

学比較文学科に於いて文学理論に係る講義、「フィクション論への誘い―文学・歴史・遊び・人間―に係るワークショップ」、公開講演「漱石の夢語り―『第三夜』をめぐる―」を行い、フランス国立図書館に於いて性表象の研究及び虚構性の研究に関する資料調査を行い、五月一日帰国。

田中祐理子助教(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、八月六日大阪発、ハーバード大学 Graduate School of Arts and Sciences (GSAS) Department of the History of Science Widener 図書館に於いて二十世紀初頭アメリカ科学史研究と西欧哲学研究の動向に関する資料調査研究を行い、十月二日帰国。

藤井俊之助教(人文学研究部)は、二〇一四年三月五日発、ベンヤミン資料館、ヘーゲル資料館、ミュンヘン大学に於いて研究課題「アドルノ思想の時間論からの読み替えに係る調査研究調査」the Irish Centre for Transnational Studies に於いてドイツ学会国際大会に参加及び研究課題に係る情報

資料収集、アドルノ資料館、ウィーン大学に於いて研究課題に係る調査研究及び資料調査、ミュンスター大学に於いてドイツ哲学会に参加及び情報収集を行い、二〇一五年三月四日帰国。

招へい研究員

。徐 興慶 台湾大学教授
近代日本の中の後期水戸学—思想史からのアプローチ—

(文化生成研究客員部門)

受入教員 山室教授

期間 六月十六日～九月十五日

。任 城模 延世大学副教授

第一次世界大戦後における帝国改造論の日・朝思想連鎖

(文化連関研究客員部門)

受入教員 山室教授

期間 八月十五日～

二〇一五年二月十四日

。LACHAUD, François Gilbert フランス極東学院教授

変革期における宗教の政治的・社会的役割：比較研究の試み

(文化生成研究客員部門)

受入教員 富永教授

期間 九月二十日～十二月十九日

。金 秉駿 ソウル大学教授

秦漢時代における「鼎」設置過程の復原

(文化生成研究客員部門)

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一五年一月五日～七月四日

招へい外国人学者

。NIELSEN, Bent ロペンハーゲン大学准教授

中国古代学術思想史—讖緯思想の研究

受入教員 富谷教授

期間 九月一日～十一月三十日

。姜 明淑 培材大学校教職部副教授

日本植民地支配後期における朝鮮教育政策研究

受入教員 水野教授

期間 九月一日～

二〇一五年八月三十一日

。許 栄恩 大邱大学校・人文大学教授

日中古典文学の比較研究：特に女性の役割をめぐって

受入教員 井波教授

期間 七月十五日～

二〇一五年一月三十日

。NGUYEN, To Lan Vietnam Academy of Social Sciences, Researcher Fellow
東アジアにおける『三国志演義』の翻訳

受入教員 金教授

期間 十月二日～十一月一日

。水野 宏美 ミネソタ大学歴史学部准教授

20世紀日本の化学肥料の歴史

受入教員 藤原准教授

期間 十二月二日～

二〇一五年七月二日

。韓 程善 高麗大学校国際学部准教授
日本帝國と専門新聞記者の誕生、1905-1937

-1937

受入教員 山室教授

期間 二〇一五年一月六日

～六月三十日

。漆 麟 西南大学美術学院講師
日中戦争期におけるモダニズム美術の諸相

受入教員 石川教授

期間 二〇一五年一月十四日～

二〇一六年一月十四日 (継続)

。葉 純芳 北京大学歴史学系（中国古
代史研究中心） 副教授

『周礼正義』の書誌学的考察及びその
索引提要の編纂

受入教員 武田教授

期間 二〇一五年三月一日～

十二月二日（継続）

外国人共同研究者

。TAN, Nicolas Pierre

中学生の不登校の日仏比較研究

受入教員 立木准教授

期間 四月一日～

二〇一五年三月二日（継続）

。崔 在馥 国史編纂委員会（歴史振興
室） 編史研究士

韓日仏教関係研究

受入教員 矢木准教授

期間 五月九日～十二月九日

。SCHERRMANN, Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資
料の調査

受入教員 岩井教授

期間 五月十五日～

二〇一五年三月二日（継続）

。林 佩瑩 エルサレム・ヘブライ大学

東洋学部博士研究員、東洋学非常勤
講師

末法時代の祖師像―聖徳太子と南岳慧

思伝について

受入教員 ウィッテルン教授

期間 七月十一日～十月六日

。尹 寧實 University of Toronto,
East Asian Studies Department

Postdoctoral Researcher

戦時期植民地朝鮮における内鮮一体論

と民族超克論―崔南善を中心にして

受入教員 水野教授

期間 八月一日～

二〇一五年六月三十日（継続）

。李 怡文 イェール大学歴史学部博士
課程学生

日中貿易における寺社と商人、九〇〇

―一五五〇年

受入教員 岩井教授

期間 九月二十日～

二〇一五年五月三十一日

。BATRAM, Anja ポーフム・ルール
大学専任講師

日本近世における神社の社会史

受入教員 岩城准教授

期間 十月二日～二〇一五年十月一日

。鄭 琮樺 韓国映像資料院韓国映画史

研究所専任研究員・慶熙大学演劇映

画学科兼任教授

植民地近代の日本・朝鮮映画交渉に関

する歴史的研究

受入教員 水野教授

期間 十一月二五日～

二〇一六年十一月二四日（継続）

外国人研究生

。ANTON, Alina Elena

日本に帰国した日系アメリカ人と日系
カナダ人のアイデンティティに関す
る研究

受入教員 竹沢教授

期間 十月一日～

二〇一五年九月三十日

。JENSEN, Christopher Jon

夢の内容と現実の生活：東アジア中世
仏教における夢の物語

受入教員 船山教授

期間 四月一日～

二〇一五年九月三十日

。游 秋政

中国陶磁史研究

受入教員 岡村教授

期間 十月一日～

二〇一五年三月三十一日

東アジア人文情報学研究センター講習会

。二〇一四年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（九月二十九日）

オリエンテーション 富谷 至

漢籍について（四部分類概説を含む） 井波 陵一

カードの取り方―漢籍整理の実践土口 史記

第二日（九月三十日）

工具書について 高井 たかね

漢籍関連サイトの利用

文学研究科閲覧掛 大西 賢人

実習を始めるにあたって

梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月一日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十月二日）

和刻本について

文学研究科教授 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月三日）

朝鮮本について

実習解説 矢木 毅

情報交換 土口 史記

。二〇一四年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月十日）

オリエンテーション 富谷 至

経部について 古勝 隆一

叢書部について 藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日（十一月十一日）

史部について

漢籍データ入力実習（二） 宮宅 潔

第三日（十一月十二日）

子部について

漢籍データ入力実習（二） 永田 知之

第四日（十一月十三日）

集部について

安岡 孝一

人間・環境学研究科教授

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十四日）

漢籍と情報処理

ウィットテルン・クリスティアン

実習解説 土口 史記

情報交換 井波 陵一

第一次世界大戦研究から

「現代・世界」への問いかけ

山 室 信 一

二〇〇六年に基礎文献の会読や研究動向のサーベイを行うための予備研究会として発足した「第一次世界大戦の総合的研究班」は、二〇一五年三月をもって一応の区切りをつけることになった。

とは言え、二〇一八年に停戦百周年を迎えるまでは、世界各地で開催される第一次世界大戦研究に関するシンポジウムに対応する必要があるし、ベルリン自由大学を拠点として進められているインターネット事典作成という事業に研究班が東アジア関係の総括担当として係わっていることもあって、第一次世界大戦研究をフォローアップしていく責務も負っている。

何よりも、岩波書店から報告書として『現代の起点 第一次世界大戦』全四巻を刊行したものの、人文研の共同研究としては初めての試みと思料される中間報告として小関隆『徴兵制と良心的兵役忌避』・岡田暁生『クラシック音楽』はいつ終わったのか?』を皮切りとして人文書院から刊行されている「レクチャー・第

一次世界大戦を考える」シリーズが平野千果子『アフリカを活用する―フランスの植民地へのまなざし』まで一七冊を数えた上で、さらに続刊が予定されている。また、班員による関連著作の単著の公刊が今後も続くなど、研究そのものは鋭意続けられているからである。

加えて、開戦百周年の年頭に世界で最初に開催した国際ワークショップでの成果を収載した雑誌『思想』の特集号「100年後の第一次世界大戦」（二〇一四年十月）、そして先に挙げた『現代の起点 第一次世界大戦』や「レクチャー・第一次世界大戦を考える」などに掲載された論稿や著作などの英語版や独仏語訳などを編集・刊行する準備も進んでおり、班が終了したことで能事畢れりと済ますことはできない。共同研究で取り上げたテーマを、班終了後にもいかに持続性をもって深化・展開させていくかは、マンネリ化を回避することと並んで共同研究というシステム運営にとって常に意識しておかなければならない問題点であろう。そうした問題状況を踏まえたうえでありていに書けば、大戦班が未解決のままに残した論点は決して少なくはない。大戦班が戦争そのものの研究を目的としたものではなく、第一次世界大戦前後から現時点までのタイムスパンをもって、世界の変動を総体として捉えようとしていたものであったことからしても、一つの

解釈を与えれば、そこから様々な論点が噴出するという一種の永遠循環の運動に入っていかなざるをえないからである。かくして、未解決のままに残した論点についてはもちろんのこととして、第一次世界大戦研究そのものから導出されてきた新たな論点にどのように回答を与えていくのか、ということが次なる重要な課題として立ち現れてくることになったのである。

顧みれば、大戦班を発足させるにあたって私たちは、多様な研究分野の研究者を結集する基軸として「世界性」と「総体性」を掲げ、それによって「世界文化の総合的研究」を設置目的に掲げる人文科学研究所における共同研究の意義を問い直すことを期したが、その後の研究の進展の中で「現代性（持続性）」と「感性」をも共同討究の基軸として提示するに至った。そうした基軸に向けて、それぞれの専攻分野のトーチカから議論を提示して戴くことによって上記のような成果を挙げることができたとひとまずは総括することができ。こうした共同研究の試みに積極的に参加し、多くの有益な御示教と御提言を賜った班員およびゲスト報告者各位に御礼申し上げなければならぬ。

だが、今、改めて立ち止まって省みたとき、果たして第一次世界大戦がいかなる意味で、「現代の起点」であったと言えるのか、そこにおいて想定している

「現代」の内実としてどのような事態や事象をあげることができなのか、についてはまだまだ結論を出すには考えるべき問題が山積していることに慄然とせざるをえない。いや、たとえ他の誰から問いかけられることがなくとも、「現代とは何か」という問題は第一次世界大戦を研究課題としてきた私たち自身が解答していかねばならない責務を負っているはずである。

もちろん、第一次世界大戦を「現代の起点」と位置づける視点を提示したことで、了解できるようになった事柄も少なくはなかったと思われる。例えば、第一次世界大戦を「現代の起点」と位置づけることによって、帝国主義時代の終わりの始まり、資本主義と社会主義の対峙する国際体系の現れ、デモクラシーへの対抗・分岐としてのコミュニティズムとファシズムそしてニューディールの対峙とその終焉、ブルジョワ文化の衰退と大衆文化の噴出、理性に対応する無意識の規制力の現れ、暴力の機械化とそれに対抗する非戦思想の台頭、大量消費社会とそれを爆走させる宣伝技術の洗練、科学技術の国家管理化、芸術における電気化・電子化による複製化の昂進とアウラの喪失……などを現代という時代の徴表として挙げることができた。

ただ、私たちが大戦班を立ち上げるにあたって、表立って掲げることとはしなかったものの、真の問題意識

として確認していたのは「われわれは、一体われわれの現在性・空間性において何であるのか」という根底的課題に「人文学」という学知をもって答えるということであった。その問題性は、第二次世界大戦後七十年という時点、集团的自衛権が法制化されることによって憲法体制が根底から変質しつつある二〇一五年という時点において、全く異なった意味合いをもって私たちの前に立ち現れてきている。それは「戦争と平和」といった問題という目に見えやすい次元にとどまらない。何よりも「人文学」という学知のあり方そのものが、八年前とは大きく布置状況が変わった中に置かれていたことが挙げられる。現在、私たちは「ミッシェンの再定義」に始まって「理工系人材の育成強化」が声高に喧伝される昨今の風潮の中で軽視されようとしている人文・社会科学の存在意義とは何なのかという答えを自発的に提示しなければならない地点に立たされている。

そのことの意味することとは何なのか。

私たちが第一次世界大戦を研究対象に据えつつ、同時に自らに問うことを課題としていたのは前記のように「自分たちがいかなる時間や空間の中で生きているのか？」ということであったが、それはあらゆる学問的営為において不朽の、そしてその課題の「現在性」

ゆえに繰り返し問い続けなければならない問題だったはずであった。そうであるとすれば、新たに発足する「現代／世界とは何か」研究班においても、その課題を引き継いでいくとともに、その検討を通じて「人文学とは何か」を自ら明らかにしていくことが要請されていることもまた自明となってくるはずである。

それでは「現代／世界とは何か」そして「人文学とは何か」という二重の課題に応答していく共同研究で何が基軸となるのか。

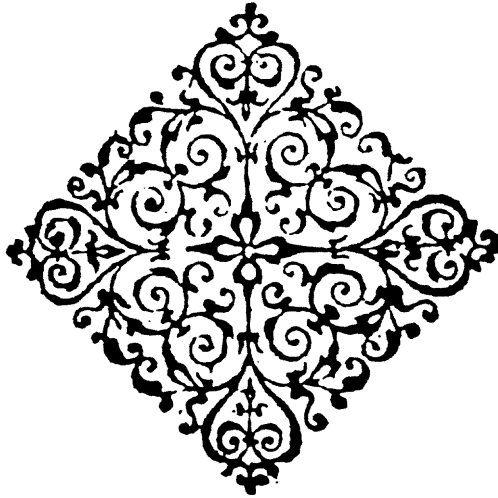
それをあくまでも私見＝試見として例示すれば、「現代という時間相」と「世界という空間層」そして「ヒューマニティという学知」の三点をもって構成される底面をもつ「人文学の三角錐」の頂点の集合として「現代／世界のクラウド像」を描出していくことではないかと想定している。

すなわち、「現代」や「世界」を対象化し、その実相を解明するためには、それを相対化する「近世」や「近代」といった時代相と「リージョナル」・「ナショナル」・「ローカル」といった空間層との対比や比較という作業が不可欠となる。「現代」という時間性と「世界」という空間性を対自化させる必要があるからである。そのためにこそ他の時代や空間を課題とされている方々との共同研究が必須の要請となるし、当然、

そこから描出される「人文学の三角錐」はそれぞれの研究者の専攻分野や研究枠組みによって異なってくる。

だからこそ、それらが指し示す「現代／世界」は異なった様相を示すであろう。かくして、一義的には決定できない像としての「現代／世界」から逆照射することによって人文・社会科学のレーゾンデートルを明らかにしていくことをまた併せて目指すことができるのではないか―それが「現代／世界とは何か?―人文学の視点から」という二重点の問題設定を構成している所以である。もちろん、こうした視座はあくまでも叩き台として提示するものであって、何ら議論を予め拘束するためのものではない。

何よりも人文研の共同研究班とは、そうした根源的な、ある意味では書生じみた「問いを問う」という議論に耽ることを許す自由発論のアゴラと存続していくことに意義があり、その多大な恩恵を受け続けてきた身としては、「討究する愉悦」「論破される快感」を定年退職の日まで満喫させて戴ける、その至福に浸っていたというのが私の極めて私的な願いに他ならないからである。



アフガニスタンの地図

稲葉 穰

人文科学研究所には現在、旧ソ連軍参謀本部作成のアフガニスタン二十万分の一地図、および同五十万分の一地図が所蔵されている。たしか二〇〇〇年代のはじめくらいに、アジア各国に関するこの旧ソ連軍参謀本部作成地図のシリーズが一斉に売り出され、アフガニスタンの地図を当時の図書委員会に無理をお願いして購入して貰った（それなりに高価だった）。アフガニスタンに関しては良質な地図がないというのが今も昔も悩みの種で、かつてはアフガニスタン・パキスタンの発掘調査に参加したメンバーが現地で購入した地図、あるいはL・アダメックが編纂した『アフガニスタン歴史・行政地名辞典 Historical and Political Gazetteer of Afghanistan』に附されていた地図などに頼っていたが、掲載される地名が不十分であったり、地図によって同じ場所の呼び名が異なるなど、問題は多かった（もちろんそれは地図のせいというよりは、そもそも正確な地理的調査に基づく情報が欠けていたことによ

るのだが）。この点で、縮尺が詳細であるだけでなく非常に細かな地名まで掲載しているこの旧ソ連軍製地図は有り難かった。ただ当初はこの地図が飛び抜けて詳細であったため、ここに掲載される地名やその位置について他の地図で検証することができず、信頼性という点で一抹の不安はあった。しかしその後幾つかのルートを通じ、一九五八年にアメリカ国防測量庁（Defense Mapping Agency）が作成した十万分の一地図の画像、一九六九年にアメリカ軍地形測量部隊（U.S. Army Topographic Command）が作成した同じく十万分の一地図（この地図はアフガニスタンに駐留した多国籍軍が一時使用していた）の画像を参照できるようになり、旧ソ連軍作製地図と対照することが可能になったためこの問題は幾分解消されている。

一方アフガニスタン地域の地図に関するもう一つの問題は、この地域の地図を論文等に掲載しようとした場合、なかなか具合の良いものがないという点である。既存の地図は、多くの場合アフガニスタンを西アジアの地図の東端、あるいは南アジアの地図の北西端あたりに描いていて、アフガニスタンを中心とした地図で適度に詳細なものが見あたらない。特に周辺地域との関係でアフガニスタンの地勢を見ようとした場合、良い地図は皆無と言ってよかった。そこで必要な場合は

自分で地図を作成することで対応してきた。と言って
も一から地図を描く能力など無いので、既存の地図を
スキャンした上で加工を施して利用してきたのである。
前述のように西アジア、南アジア、あるいは中央アジ
アの端っこに描かれてきたアフガニスタンも、スキャ
ンした画像を組み合わせることで地図の中心に持つて
くることができた。xviiiに Adobe 社の Illustrator の
ようなアプリケーションを用いて河川や海岸線、ある
いは等高線をトレースして地形図を作成し、必要な情
報（歴史的な都市の名前とか地域名など）を付加する
と、随分と使い勝手の良い地図ができたものである
（実はこのあたり元地図の著作権等との絡みで見れば
グレーゾーンかもしれないのだが）。もちろんこれは
手間と時間が大いにかかる作業であったが、実は結構
楽しいものでもあった。アフガニスタン地域の古代中
世史を専門としながら、私自身は現地を訪れたことが
ない。旧ソ連軍がアム川を渡って軍事侵攻を行ったそ
の年私は大学に入学し、この地域の歴史に興味を持
ちだした頃にはソ連軍のバックアップを受けた共産主義
政府の軍と、欧米やイスラム諸国の支援を受けたムジ
ヤーヒディーンの戦闘が激化し、一九七〇年代まで精
力的に行われてきた日仏伊英などの調査団による考古
学発掘調査も全て中断してしまっていた。その後アフ

ガニスタンの情勢変化に応じて何度か渡航を計画した
ものの、そのたび突発的な戦闘やテロ活動の活発化な
どに妨げられて機会を逸し、未だに実現できていない。
そんな自分にとって、地図を描き等高線をなぞりなが
ら頭の中で地形を再構成し、どのようにして人々やモ
ノがそこを通過したのだろうかと思案に耽る時間は貴
重なものだった。

と、以上過去形で書いたのにはわけがある。ここ十
年ほどでアフガニスタンのみならず、世界中の地域の
地理情報を取り巻く状況が激変したからである。地図
と等高線で妄想を募らせずとも Google Earth を立ち
上げればより詳細な情報が目に飛び込んでくる（しか
も相当なズームアップが可能である）。簡便な GIS
ソフトウェアの普及により、NASA などが提供する
地形データを用いて標高情報付きの美麗な地形図を素
人でもそれなりに描けるようになってきた（Google
Maps を利用すれば、簡便な地形図だけならあつとい
う間に手に入る）。

かくして、最近では私も自分でちまちまと地図を作
成することが少なくなった。技術革新の凄まじいスピ
ードに感嘆するばかりなのだが、実際のところ少し寂
しくもある。かつては、スキャンした画像上で等高線
や水路、海岸線をトレースする作業は、実は自分にと

つては「写経」のようなものだと言つては周囲に笑われたものだが、冗談ではなく、無心に線をトレースする作業は、雑念からの解放と心の平静を私に齎してくれた。最近妙にイライラが続いたり胃が痛むことが多いのは、世界中の地図が簡単に作れてしまう最新技術のせいなのではないか、と的外れなことを考えたりもするのだが、それこそ無心に地図を描いて追い払うべき邪念なのだろう。

二つのレクイエム

小 関 隆

一九八六年のことだったと思う。「ヨーロッパに住みたい都市」についてのアンケート結果が報道され、私が当時住んでいたバーミンガムの成績もまったくもってばつとしなかったのだが、それよりもはるかに下、最下位近くに沈んだのがすぐ隣のコヴェントリであった。コヴェントリといえば、一九四〇年十一月に大規模な爆撃を受けたことで有名である。自動車をはじめ

とする軍需関連産業を多く抱えるコヴェントリは、ドイツ空軍によるブリッツで文字通り灰燼と歸した。第二次大戦の際の爆撃と聞いて多くの人々が想起するのはおそらくドレスデンだろうが（爆撃は一九四五年二月）、コヴェントリはそのイギリス版ともいえる存在である。戦後復興に向けた都市計画の失敗なのか、現在のコヴェントリのシティ・センターがなんとも醜悪で魅力のかけらもないことは否定できない。ところが、そんなコヴェントリに私は何度も足を運んだことがある。近隣のウォーリック大学が所蔵する貴重な史料だけが理由ではない。唯一無二と評すべき素晴らしい大聖堂があるからだ。爆撃で破壊されたセント・マイクル大聖堂の廃墟を残したまま、それに接木するように新しい大聖堂が建設されはじめのは一九五六年、有名な建築家ベイジル・スペンスが設計した新大聖堂の大胆なモダニズムは、六二年の完成当初こそ激しい論争を惹起したが、今日では高い評価が定着している。たしかに一見に値する大聖堂である。

この大聖堂に由来する作品に、二〇世紀のイギリスで最も成功した作曲家の一人といえるベンジャミン・ブリテンの「戦争レクイエム」がある。熱心な平和主義の活動家でもあったブリテンは、一九三九年四月、ヨーロッパに垂れ込めてきた戦争の暗雲から逃れるよ

うにアメリカに移住するが、四二年にはイギリスに戻り、良心的兵役拒否者となる。一九一三年生まれのブリテンにとって、第二次大戦は第一次大戦とは比べものにならないほど衝撃的な経験であった。一九四五年七月にはヴァイオリニストのイエフ・ディ・メニューインとともに同年四月の解放から間もないベルゲン・ベールゼン強制収容所を訪問し、コンサートを開いているが、収容所で受けた衝撃を作品化したといわれるのがオペラ「ルクレティアの陵辱」である。第二次大戦のみならず戦争全般の非道を普遍的に告発する作品に着手するきっかけが与えられたのは一九五八年一〇月、新しい大聖堂の建設を進めてきたコヴェントリ大聖堂祝典委員会が、献堂式のための作品をブリテンに委嘱してきたのであり、六二年一月にはフル・スケールのレクイエムが完成した。一九六二五月三〇日の初演に招聘されたソリストは、不世出の名バリトン、デイトリヒ・フィッシャー・ディースカウ（第二次大戦中にはイタリアのアメリカ軍捕虜収容所で二年間を過ごした）、テノールはブリテンの公私にわたるパートナーであったピーター・ピアーズ、そして、ソプラノのガリーナ・ヴィシネフスカヤだったが、結局、ソ連政府からの許可を得られなかったヴィシネフスカヤの代役としてヘザー・ハーバーが出演した。初演は大成功

し、翌年にレコードがリリースされると、一年のうちに二五万枚を売った。現代音楽としては驚異的な数字である。

「戦争レクイエム」の最大の特徴は、ラテン語のミサの典礼文と並んで戦争詩人として知られるウィルフレッド・オウエンの詩が使われていることである。オウエンは第一次大戦の最終盤に戦死し、その知らせが両親の許に届いたのはちょうど休戦を祝う教会の鐘が鳴らされている時だったという。今では戦争詩人の代表格として誰もが知るオウエンであるが、彼の名声が確立されるのは第一次大戦開戦五〇周年の頃で、「戦争レクイエム」が作曲されていた時点では、無名ではないにせよ、さほど有名でもなかった。その意味では、「戦争レクイエム」の驚くべき売れ行きがオウエンのカルト化に役かったと見ることができる。

「戦争レクイエム」が表出するエモーションナリズムは、たとえばストラヴィンスキーの不興を買うことになるが、それでも、おそらくはオペラ「ピーター・グライムズ」と並び、この作品がブリテンの畢生の傑作であるというのが一般的な評価であって、上演される機会も少なくない。私が実演に接したのは一度だけ、サイモン・ラトルが指揮するバーミンガム市交響楽団の演奏であった。CDで聴く限りではさほど惹きつけ

られることもなかったというのに、この時には文字通り戦慄を覚えた。一九九七年だったはずだから、第一次大戦にもオウエンにもさして関心がなかった頃だが、作品には有無をいわせぬ力が間違いないと思う。こうした「有無をいわせぬ力」こそ、まさにストラヴィンスキーの警戒心を刺激したものに他なるまい。馬齢を重ね、多少ともシニシズムを強めた今の私には、悲劇的題材を合唱の直接性をもってセンティメンタルに表現してみせる楽曲への違和感や、音楽がもたらす「感動」を共有してしまうことの怖さへの懸念に同調したい気持ちもあるのだが、とはいえ、心身ともに震撼させられた記憶は依然として鮮明である。

実は、ブリテンには「レクイエム」と題する作品がもう一つあり、こちらは日本に深くかわわっている。コヴェントリ爆撃の年にあたる一九四〇年、ブリテンは皇紀二六〇〇年の祝典のための作曲を委嘱されたのだが、彼が提出した「シンフォニア・ダ・レクイエム」は、「神武天皇ノ神霊ヲ讃フル奉祝楽曲ノ内容ヲ有セザル節」として演奏を拒否される。拒否の理由については諸説ある。ブリテンは神武天皇を偲ぶしめやかな作品を依頼されたものと誤解していた、スコアに天皇へのそれではなく両親への献辞が書き込まれていた、ちょうどこの頃にイギリスがドイツと戦争状態に

入った、等々。いずれにせよ、キリスト教的な色彩はたしかに濃厚であるし、祝典用というには曲調もあまりに陰鬱である。結局、「シンフォニア・ダ・レクイエム」の初演は、一九四一年三月、ジョン・バルビロリ指揮のニューヨーク・フィルによって果たされ、日本では、五六年に来日したブリテン自身の指揮の下でNHK交響楽団が演奏した機会が初演となる。ちなみに、一九四〇年一二月の奉祝演奏会で披露されたのは、イベール（フランス）の祝典序曲、ヴェレツシュ（ハンガリー）の交響曲、ピツェッティ（イタリア）の交響曲、そして、リヒャルト・シュトラウス（ドイツ）の日本建国二六〇〇年祝典曲の四つであり、演奏にあたったのは斉藤秀雄が組織した奉祝交響楽団であった。ブリテンが送ったオリジナル・スコアは返却されず、一九八七年になって東京芸大に所蔵されていることが判明した。ちょうどこの年、バーミンガム市交響楽団との日本公演で「シンフォニア・ダ・レクイエム」を採りあげたサイモン・ラトルは、先乗りで来日し、芸大に通いつめた。かつて「戦争レクイエム」に手もなくひねられた経験を棚にあげるようだが、少なくともCDで繰り返し聴く作品としては、私はこちらの方が好きかもしれない。

春歌としての文化相対主義

田 中 雅 一

春歌が分かつウチとソト

私たちの世代にとって懐かしい歌をまず紹介しよう。

♪ひとつでたほいのよさほいのほい

♪ひとり娘とやるときにや、親の承諾得にやらぬ

♪ふたつでたほいのよさほいのほい

♪二人娘とやるときにや、姉のほうからせにやらぬ

♪みつでたほいのよさほいのほい

♪みにくい女とやるときにや顔に座布団せにやらぬ……

……（中略）……

♪九つでたほいのよさほいのほい

♪皇后陛下とやるときにや直立不動でせにやらぬ

♪とうつでたほいのよさほいのほい

♪尊いお方とやるときにや羽織袴でせにやらぬ

『ニッポン春歌考——もしくは「春歌と革命」』（一九七三）の著者竹中労や『日本春歌考』（一九六七）という作品がある映画監督の大島渚は、春歌に民衆のエネルギーや性の反体制的な要素を主張する。しかし、春歌というのは、そんなに革命的だろうか。確かに春歌や猥談は、権威をコケにしつつ、「民衆」を代表する男たちの絆を強めるかもしれない。しかし、こんな歌をうたって楽しい女なんているのだろうか。ここでは女は「民衆」から排除されている。例外は、なにも分らない子どもと「名誉男性」として男たちの世界にとどまることのできる、性に通じた「ものわけりのいい」女ぐらいだろう。

悪い冗談（ブラックジョーク）が分かつウチとソト

一九九六年から在日米軍基地を訪ねてすでに二〇年近い。初めて佐世保の海軍基地に出向いたとき、「あなたは、文化人類学者ですね。まずは人類学について説明してください」と尋ねられた。

はい、わたしは文化人類学者です。文化人類学は、未開人の調査・研究を行う学問です。そんなわけで佐世保にやってきました。

言うまでもなく、通常の文化人類学の調査において、調査対象者に向かってそのような説明をすることはありえない。これは、受け狙いの冗談／ボケである。

文化人類学の専門用語としての未開は「文字をもたない人々」と同義である。しかし、私が話しかけている相手は、文化人類学とは何かの説明を求める素人であり、「未開」という言葉を、文明から取り残された人々という通常の意味で受け止めることはわかっていた。しかし、そのときわたしは、この冗談（ブラックジョーク）／ボケは受けると確信していた。そして、わたしの読みが当たったことは、間髪入れずに起こった大笑いによって証明された。

このような冗談（ブラックジョーク）／ボケは、「賭け」である。「失礼きわまりない」男だとみなされて、これ以上の調査を拒否されたかもしれないからだ。

その時は、冗談（ブラックジョーク）／ボケが狙い通りに受けたのが単純に嬉しかったが、はたして同じ冗談がほかのフィールドでも使えるだろうかと考え直す、喜んでばかりいるわけにはいかない。例えば、インドやスリランカの調査地で、お話しを伺いたいのは、文化人類学者として「未開な人々」に関心があるからですなどという冗談を言ってみようという考えは、そもそも頭に浮かんでも来なかった。

考えてみれば、冗談が通じるためには、それにかかわる知識や価値観を共有していることが必要であり、日常生活においても、冗談を言うのは、理解に必要な知識を共有していると思われる相手（仲間）に限られる。そこを間違えると、座がシラケたり、相手を怒らせてしまったりする。冗談は、通じる相手と通じない相手を適切に区別したときにうまく成り立つ（あるいは冗談で区別しようとするパフォーマンス的な）、コミュニケーション上の高度な技巧なのである。

わたしはインフォーマントを、冗談の通じる「文明的な」人間と通じない「未開な」人間に分けていたのだ。冗談の分かる人間は、研究対象であつても、言わば「仲間」なのだ。通じない相手には、慎重に（人類学の教科書に則つて）対処しなければならぬ。そして、悪い冗談（ブラックジョーク）が通じる相手というのは、かなり仲間度の高い相手ということになる。

文化相対主義が分かちうちとそと

文化人類学が、「悪い冗談」を禁じているのは、相手を怒らせたら調査ができないといった実用的な理由もさることながら、文化相対主義によるところが大きい。自身の文化が絶対的に正しいと思ひ込む自民族中

心主義は、民族差別や偏見、外国人排除を助長する。これにたいし、文化相対主義は、複数の文化の間に優劣の差はなく、どれにも尊重する価値があるいと主張する。文化相対主義は本来、差別するマジョリティにたいして提示された反差別主義の考え方なのである。

しかし、異文化を尊重しようという文化相対主義は、いくつかの困難や非難に直面する。ここでは四点挙げておこう。もつとも分かりやすいのは、特定の社会が実施している「悪弊」を批判できないということである。これについては、少女の心身に過酷な影響を与える女子割礼 (Female Genital Mutilation) は、しばしば文化相対主義の視点から擁護されてきた、という事実から明らかであろう。

つぎに、マイノリティの文化擁護のための理念である文化相対主義が、マジョリティの擁護とマイノリティの排除に使用される場合があるという点が挙げられる。たとえば、フランス文化を外国人から守りましょう、外国人はそれぞれ自分の国で文化実践をしてください、というような移民排斥キャンペーンがこれにある。

文化相対主義には、世界がたくさんの文化世界からなっていて、そこには明白な境界があるという前提が存在する。これは、グローバル化が進む今日 (そして

過去においても) 明らかに間違っている。

最後に、文化相対主義もまたウチとソトを分けるパフォーマティブな言説だという深刻な問題が存在する。文化相対主義は普遍的な価値観かもしれないが、その適用範囲は欧米を中心とするマジョリティの人間に求められる「文明的態度」である。尊重の対象となるマイノリティに文化相対主義が求められることはない。それが求められているのは異文化の変化を促すことになり、「尊重」に反するからだ。

春歌とわたしの悪い冗談、そして文化相対主義。対象は異なっても、それらに共通するのはウチとソトを分け、特定の人々を排除する言説である。さらに、各々の言説には排除する存在 (女、未開人、尊重すべき異文化) が含まれているということだ。

宴もたけなわ、隣の部屋から春歌の大合唱が聞こえてくる。

♪ひとつでたはいのよさほいのほい

♪ひとり娘とやるときにゃ……

つい、顔をしかめてしまった私に、「春歌って、か

これらの文化なんだ、尊重しないとね」と、別の人類学者がささやく。そして、互いに苦笑いしてしまう。そう、「異文化」は尊重しなければならない。しかし、文化相対主義者が尊重することを求めているのは、結局のところ、その普遍性を疑わない文化相対主義者、つまり文化相対主義という「文化」（価値観）を共有する人たちが自身ではないのか。

文化相対主義という春歌を声高に歌い続ける人類学者たちよ、永遠なれ!!

白と黒のエチュード

——「クビライの動物園」より

宮 紀子

二〇一五年春、和歌山のアドベンチャーワールドで誕生したばかりの双子 panda、桜濱・桃濱の愛らしい姿が話題を呼んでいる。日本に初めて中国の珍獣熊貓——^{パンダ}（^{シンマオ} 胖的（太ったヤツ））がやってきたのは、私が生まれた一九七二年の日中国交正常化の結果であっ

た。数年後、ひらがな学習用に幼稚園でもらったカルタの「ら」は「^{ラン}蘭・^{カン}康可愛い名前」で、遊ぶたびに激しい争奪戦が繰り広げられた。人民大学に短期留学した際、北京動物園でぬいぐるみを購入したものの、スツケースに収まらず、行く先々で失笑も買った。

北京の動物園の歴史は古く、少なくとも一三世紀の大元大蒙^{イェケモンゴル}古国までは遡る。いわゆるマルコ・ポーロの『百万の書』（『東方見聞録』）は、冬的首都大都^{ダウド}の内城と外壁の間の緑地に白い大鹿をはじめ珍奇・綺麗な動物が放し飼いにされていたことを伝えているし、京都・鎌倉の禅僧たちの崇拜の的であった慶元路^{ラシボウ}（^{ラシボウ} 寧波）の高僧楚石梵琦も旅行記のなかで、間近で見た鸚鵡、孔雀、ライオン、象、虎、駱駝などを詩に詠んでいる。北京地区の現存最古の地方志——熊夢祥の『至正析津志典』にも記録がある。これらの珍獣の多くは、^{ライオン}西蕃からの黒豹、^{ライオン}俱喃（^{ライオン}「キーロン」）からの黒獅子、^{ライオン}占城をはじめとする東南アジアから来た犀・象、といったように、外交上の贈り物だった。そして、中央アジアのチャガタイ・ウルスやアフリカ東岸の馬合答束^{マカダシヤウ}（^{マカダシヤウ} 「モガデシオ」）、インドの刁吉兒^{デオキリ}から陸海の駅伝^{ステーション}を利用して二、三年がかりで連れてくるライオンや金銭豹^{チンネイ}、土豹たち。種類にもよるが一日に新鮮な羊肉をなんと三斤から七斤も喰う。維持費だけでも

とんでもなくカネがかかる。そのうえ、海東青シシコなどの猛禽類と同様、巻き狩りでクビライ様のお役にたつべく、調教も必要であった。

とうじ、動物園のなかでとりわけ人目を惹いたのは、『元史』巻十四「世祖本紀」〔至元二十四年（一二八七）三月丙辰〕に

馬八児国マアバル、使いを遣わし奇獸一を進む。驃ラバに類し而して巨、毛は黑白間錯し、名は「阿塔必即」。

と特記されたそれだろう。どうみてもシマウマだ（パングじゃありません）。だが、ここにいう「阿塔必即」が何語由来の音訳なのか、管見の限り説明されていない。ペルシア語でシマウマは *gür-khar* 驢ロス→驢ロスだし、アラビア語では *himari wabshi* 野生の驢ラバで、音価がまったく合わないからだ。のちの『五体清文鑑』「馬匹類」の駉驢に相当するテュルク語が *ataqair* へ *qadir* となっていて、まさに馬↓驢だから、『世祖実録』の編纂官がウイグル文字の語頭の *qa* を *q* に読み誤って漢字音訳を付した——ほんらいなら阿塔哈即兒と表記すべきだったのかもしれない。いずれにせよ、これらは最大の特徴を思い切り無視した命名で、『元史』巻十五「世祖本紀」〔至元二十六年〕で

は

是の歳、馬八児国マアバル、花驢二を進む。

と意識される。花ハナは、紋様のあることを強調する (*khata* の音価を意識してか、のち明代の有名な鄭和の一連の航海録でも、福鹿あるいは花福鹿と訳す)。これをみた曹伯啓という官僚は、天地精英の海隅に及び、獸毛文彩にして花驢と号す。同来の使者は烏鬼の如く、還つて責む中原の札法の疎きを」という七言絶句を詠んでおり、使節団・隊商の一行には、シマウマの原産地——モガディシオやアデン出身の黒人が加わっていたようだ。インドのマアバル（コロマンデル海岸）は、フレグ・ウルス（イル・ハン国）と大元ウルスの中継する重要港で、『百万の書』が伝えるごとく、国主自らが毎年大枚を叩いて、アフリカ東岸やアラビア半島から多種多様な馬を大量に購入しては、あらかた気候の苛烈さと飼育の拙さのために衰弱死させており、繁殖技術ももっていなかった。

いっぽうで、*altai* なるペルシア語が縞状・波状の紋様の絹地を指し、モンゴル時代の地中海沿岸で取引されていたことがわかっている（フレグ・ウルスおよびティムール朝の細密画を多く収録する *Dien*

Album fol. 70. s. 12 の馬覆いは白黒の縦縞紋様。虎猫・縞猫を意味する英語の tabby もこれに由来）。アラビア語でも himar wahshi に 'attabiya を冠する用例がモンゴル時代の百科事典に見える。であれば「阿塔必即」の「即」は「耶」の誤りだろう。ともかくにも、『元史』は外来語に弱い、のだ。

一三〇〇年頃、唐文質なる人物が写生し、大元ウルス朝廷の秘書監（＝科学技術庁）に保存されていたという「諸国の風俗衣服、貢献の物件、珍禽異獣」の図——「職貢図」には、かのシマウマは確実に登場しており、品種まで判明しただろうし、麒麟やそれこそ金齒国あたりから献上されたパンダも描かれていたかもしれない。副本でもよいから発見が待たれる（シマウマはオスマン朝やムガル朝でも珍しがられたらしく、図像資料が何枚か伝来する）。

ちなみに、以上の知識を踏まえるなら、『元典章』卷五「臺綱」【監察合行事件】の冒頭の一篇

至元二十五年二月初二日、白寺の裏の北裏阿答必察迭児の裏にて、相哥丞相を頭と為す尚書省の官毎、玉速帖木児大夫を頭と為す臺官毎が一同に奏読過して奉じたる聖旨

から、北京に現存し動物園とも程近いテイベツト仏教の遺跡——白塔寺の境内に設えられたクビライの宮帳が 'attabi-chadir * 舶来物・最新流行のシマウマ柄の布地（今の日本だと忌避されそうですが、『百万の書』や『南臺備要』によると、虎皮の察只児もあつたらしいので本物の皮革かもしれません。まさか、贈られたばかりのシマウマ?!）できていたこと、読み取るのは容易いことだ。モンゴル時代史の研究に多言語習得が必須とされる所以である。

*『高昌訳語』「衣服門」の帳房・察的児 cādir、『圭齋文集』卷九「馬合馬沙碑」の「茶迭児」云者、国言廬帳之名也、『回回館訳語』「器用門」の傘・徹忒児 chairs。

Uボートに乗って

宮 宅 潔

ここ数年、中国古代の軍事制度を主な研究テーマにしている。こうした研究をやってみようと思ひ立つた

理由の一つは、ドイツの友人から一冊の論文集を紹介され、最近では欧米で中国軍事史研究の見直しが進められている由、教えてもらったことに因る。この新たな研究動向の背景には、従来の欧米での中国史研究が「文」の側面にはかり関心を集中させ、「武」を軽視してきたという反省がある。確かに、高等文官試験を経た文人官僚とその予備軍が支配層を形成するという中国社会のあり方は西洋人にとって非常に大きな衝撃であつたので、ついには「平和主義の中国」という先入観が彼らのあいだで形づくられるに至り、その影響が今でも案外根強く残っている。中国史研究における「武」の軽視もその一つの現れといえる。

われわれ日本人はこの手の先入観からは自由であるはずだが、一方で日本には日本の事情がある。何よりも第二次大戦での敗北以降、日本の中国史研究者の間には軍事史研究をいささかタブー視する傾向があつたという。私自身は、折に触れてそのような昔話を聞かされつつも、正直なところそれをなかなか実感できないでいた。だが軍事制度を扱った科研の報告書を何人かの先生方にお送りしたところ、ある大先生から、自分の若い頃は屯田兵の研究を始めるのにもちよつとした決心が要つたというコメントを頂戴し、自分の知らない「時代の雰囲気」がかつては確かに存在したこと

をあらためて教えられた。

知らないといえ、われわれの世代のほとんどの人間が「戦争」や「軍隊」とは如何なるものなのか、身をもつて実感した経験を持たない。軍事史の勉強を始めた頃、先輩の一人からこんな忠告を頂いた。たとえば「師団」とか「連隊」とかいう言葉を聞いて、その語が持つ意味はもろろんのこと、その語が帯びるイメージまでピンとくるのでなければ、軍事史研究などとうてい覚束ないのではないかと。まったくその通りで、返す言葉がない。とはいえ、戦争を知るという目的のために、何から手をつければいいのかもよく分からない。正攻法なら古今東西の重要な戦役史研究や軍事理論書でも読み進めてゆくべきか、それともいつそのこと实地に体験入隊でもしてみるべきなのか。ともかく今は興味と偶然とにまかせて、大岡昇平の『俘虜記』を引っ張り出してきたり、アントニー・ビーヴァーの本で独ソ戦の泥沼に足をつっこんでみたりして、これも勉強の一部だと決め込んでいる。昨年の秋にシカゴ大学での学会に招いていただいた時、宿舎から目と鼻の先の産業科学博物館にUボートの実物が展示してあると知り、ぜひ見てこようと決めたのも、こうした理由があつてのことである。前置きが長くなった。

このUボート(U五〇五)は一九四四年に西アフリ

カ沖でアメリカ軍によって捕獲されたものである。軍事機密のかたまりでもあるUボートを敵の手に渡さぬため、捕獲されそうな場合は艦を自沈させるよう義務づけられ、海水を艦内に流し込むためのパイプや爆弾が設けられていたが、この艦には沈没前にアメリカ兵が乗り込み、すでに開けられていたパイプの蓋を閉め直し、爆弾を解除し、自沈から救ったとのこと。その後、バミューダの海軍基地まで曳航されて内部を調べつくされ、ドイツ降伏ののちには対日戦の戦時国債販売のキャンペーンに動員されたりしたもの、やがて無用の長物になり、砲撃演習の標的にされるところを、シカゴ人であった捕獲隊の指揮官が運動して、産業科学博物館に引き取られることになった。

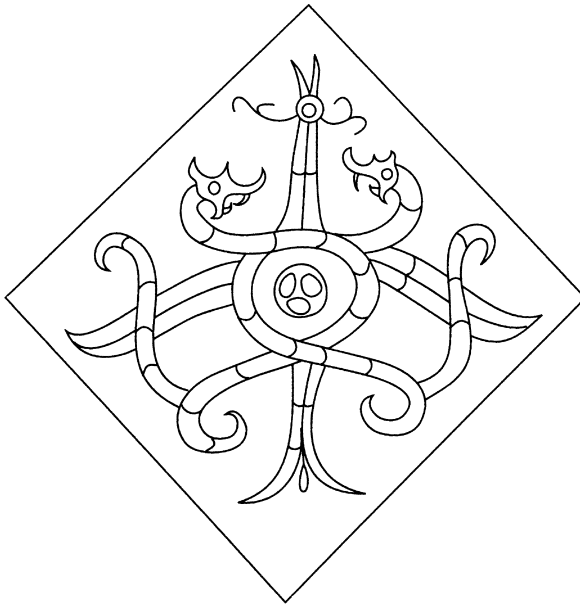
時差ぼけでまったく寝られないのもあって、博物館には朝一番で出かけてみた。まだ館内には見学者もまばらだけれども、親子連れや小さな子供の集団が目につく。いわれてみれば小学生の社会見学にはもってこいの場所で、展示も子供向けに作られていると感じた。入館料のほかに追加料金を払えばUボートの「乗船ツアー」にも参加できるというので、さっそく申し込み、つては屋外展示だったのが、現在は博物館建物のそばに専用の地下展示室が作られ、そこに移されているの

で、そのせいか展示室までのアプローチがやたらと長い。その長い通路に沿って、第二次大戦の勃発から始まる、いわゆる「大西洋の戦い」の歴史に関する展示が並べられていて、ドイツの暗号解読をめぐる情報戦についてもしっかり紹介してあった。

ようやく展示室にたどりつく、まずは巨大なご本尊に圧倒される。その周りにはUボートそのものについての解説・展示はもちろんのこと、捕獲作戦の詳細や捕虜となった乗組員の処遇についても紹介があり、ドイツ製たばこの箱まで飾られていた。仕上げはもちろん艦内見学で、狭い艦内をガイドさんの後について見て回り、「ほら、持ってみて！ とつても重いから開けた後も遠くにはやれなかったのよ！」という説明を聞きながら、くだんの自沈用パイプの蓋を、小学生たちに混じって持ち上げた。

実のところ、Uボートの実物を見るのはこれが初めてではない。以前、ミュンヘンのドイツ博物館でも見たことがある。こちらも巨大な科学技術史の博物館だが、Uボートは確か天井の低い地下室の片隅に押し込められていて、そこに収まりきらない司令塔の部分だけ上階の床が抜いてあった。居住区やエンジン部分などでは、内部の構造が外から分かるよう、外板がところどころでばっさりと切り取られ、周りには他の潜水

艦も展示してあったように記憶する。あたかも、これはあくまでドイツ科学史の一コマでしかありませんよというような、無造作な扱いだった。母国で切り刻まれ、他の潜水艦と肩を寄せあうUボートと、異国の地で広々とした個室を独占し、スポットライトを浴びるシカゴのそれとの間には、戦勝国と敗戦国とのあいだに横たわる、深い溝を感じずにはおれない。歴史研究、とりわけ軍事史研究については、研究のあり方そのものがすでに歴史の一部であることを、蓋の重さと共に噛みしめた。



書いたもの一覧 二〇二四年四月～二〇二五年三月 (氏名五十音順) ●は単行本

浅原 達郎

祭公之顧命「危言」危言—もしくは危言—

日古 二三号 九月

岩波書店 四月

池田 巧

藏文注音西夏佛經 Or.12380-1842 (K.K. II.0234 k) 試釋『東方學研究論集』 臨川書店 六月

趙元任—見えざるうとばを描き出す—京大人文研漢籍セミナー 3 『清華の三巨頭』 研文出版 九月

漢語拼音方案 庄司博史編『世界の文字事典』

丸善出版 一月

石井 美保

The chiasm of machines and spirits: būta worship, mega-industry, and embodied environment in South India. *Ecologies of Care: Innovations through Technologies, Collectives and the Senses* (Readings in Multicultural Innovation Volume 4). Gergely Mohácsi (ed.). Osaka: Osaka University. 四月

イギリス帝国とインド人兵士—「マーシャル・レイス」とつての第一次世界大戦 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦 一 世界戦争』

神霊の花嫁たち—ガーナにおける女神祭祀と女性司祭の生『季刊民族学』 一四九号 七月

第一次世界大戦を考える (28) マーシャル・レイスと「小公女」—異郷で闘うインド人兵士を支えたものは何か『図書新聞』 三一六七号 七月

Traces of reflexive imagination: Matrinity, modern law, and spirit worship in South India.

Asian Anthropology 13(2) 一月

開発と神霊—土地接収とブータ祭祀をめぐるミクロ・ポリテイクス 石坂晋哉編『インドの社会運動と民主主義—変革を求める人びと』 昭和堂 二月

工場の中の神霊 田辺明生・杉原薫・脇村孝平編『現代インド—多様性社会の挑戦』 東京大学出版会 三月

石川 禎浩

中国共産党による党史資料編纂の歩み—一九五〇年代の雑誌『党史資料』を手がかりに

東洋史研究 七三卷一号 六月

研究班と読書会 所報人文 六一号 六月

『中国の赤い星』 東方 四〇〇号 六月

外国人看到的毛沢東は什麼様の? 東方早報 十二月八日

●近代東亜翻訳概念的発生与伝播（共編）

社会科学文献出版社 二月
日中近代的編訳百科全書 狭間・石川編『近代東亜翻訳概念的
の発生与伝播』 社会科学文献出版社 二月

伊藤 順 二

ロシア帝国とオスマン帝国における動員と強制移住 山室信
一他編『現代の起点 第一次世界大戦 一 世界戦争』 岩波書店 四月

ゲルジア語読本とロシア語読本の共犯関係—ゲルジア識字普及
協会の活動 橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人 大
学・学知・ネットワーク』 昭和堂 五月

帝国ソ連の成立 南コーカサスにおけるロシア帝国の崩壊と
再統合 山室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦 四
遺産』 岩波書店 七月

翻訳 ジョン・ホーン「第一次世界大戦とヨーロッパにお
ける戦後の暴力 一九一七—一九二三年・「野蛮化」再考」

思想 一〇八六号 十月

稲本 泰生

玄奘三蔵とボードガヤーの菩提瑞像『薬師寺』一八一号

薬師寺 九月

正倉院宝物の形成と布施の実践『日本美術全集 6 東アジア
のなかの日本美術』 小学館 三月

図版解説（「諸尊仏龕」金剛峯寺ほか）『日本美術全集 6 東

アジアのなかの日本美術』

小学館 三月

南京大報恩寺阿育王塔に関する序論的考察—唐宋変革期にお
ける聖遺物信仰の一斑 科研基盤研究（B）研究成果報告
書（研究代表者・京都大学大学院文学研究科・根立研介）
『美術史における転換期の諸相』 三月

井波 陵 一

ある「紅迷」の半生

図書 四月

「齒・年」「内」「白刀」「宵」富谷至編『漢簡語彙考証』

岩波書店 一月

岩城 卓 二

歴史資料としての手紙の可能性

歴史学研究 九二四号 十月

日本近世の行政・裁判をさぐる郷宿 白井佐知子他編『契

約と紛争の比較史料学』

吉川弘文館 十二月

ウィッテルン・クリスティアン

●Tsuneki Nishiwaki, Christian Wittern, Simone-Christiane

Raschmann und Magnus Kriegskorte: *Chinesische und*

manjurische Handschriften und seltene Drucke Teil 7:

Chinesische Blockdrucke aus der Berliner Turfansam-

lung, Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in

Deutschland (VOHD) Band 12. 7. 六月

Kanripo and Mandoku: Tools for Distributed Repositories

of Premodern Chinese Texts, *Digital Humanities* 2014

七月

●翻訳 Daoyuan: *Jingde Chuandeng lu-Aufzeichnungen von*

der Übertragung der Leuchte aus der Ära Jingde. 九月

Using Optical Character Recognition to Combine Transcribed Text and Digital Facsimile of Premodern Chinese Documents. 東洋学へのコンピュータ利用

第二六回研究セミナー 三月

王 寺 賢 太

メディア時評 STAP論文の政治的背景に迫れ

毎日新聞(朝刊) 四月二六日

マルク・ブロックの戦場―戦争経験と歴史的学知の変容 山

室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦 三 精神の変

容』 岩波書店 六月

書評 曖昧な中間地帯の方へ 蓮實重彦著『ボヴァリー夫

人」論』 文学界 七月

La fin de l'ancien régime en Europe selon *l'Histoire des*

deux Indes. Antoine Litti et Céline Spector (éd.),

Penser l'Europe au XVIII^e siècle Voltaire Foundation.

十月

ロシア革命 大衆活気づける一瞬の輝き

京都新聞 二月二日

大 浦 康 介

虚構の知恵・「ウソ」の効用『現代文B』(高等学校国語科用

教科書) 数研出版 四月

知恵は継承されない

京都新聞(夕刊)〈現代のことば〉 五月二七日

ガンつける 日本文藝家協会(林真理子ほか)編『ベスト・

エッセイ二〇一四』 光村図書出版 六月

●日本の文学理論―アンソロジー(ベータ版)(編著)

京都大学人文科学研究所 三月

岡 田 暁 生

●オペラの終焉…リヒャルト・シュトラウスと〈バラの騎士〉

の夢(ちくま学芸文庫) 筑摩書店 一月

●リヒャルト・シュトラウス(作曲家◎人と作品シリーズ)

音楽之友社 五月

●すごいジャズには理由がある(フィリップ・ストレンジと共

著) アルテス・パブリッシング 五月

●Imaginary Song of the West: Ryuichi Sakamoto, Masahiro

Miya and the Music of Postmodern Japan. *Contempo-*

rary music in East Asia (ed. Hee Sook Oh), Seoul Na-

五月

tional University Press.

『芸術』の崩壊と大衆文化 岡田暁生他編『現代の起点 第

一次世界大戦 三 精神の変容』 岩波書店 六月

第一次世界大戦と演奏会文化の変質―音楽国文化の思想なら

びに慈善コンサートを中心に 岡田暁生他編『現代の起点

第一次世界大戦 三 精神の変容」 岩波書店 六月

Reduktion, Repetition und Verstärkung — Klavierbüngen und musikalisches Denken des 19. Jahrhunderts. *Verkörperungen der Musik. Interdisziplinäre Betrachtung* (ed. Jörn Peter Hiekel und Wolfgang Lessing), Transcript Verlag. 六月

芸術史のための大戦研究 v s 大戦研究のための芸術史

思想 十月号

The First World War. A Trans-Disciplinary Study. *The World during the First World War* (ed. Helmut Bley and Anorthe Kremers) Klatext 十一月

岡村 秀典

漢鏡分期研究 清華大学漢鏡文化研究課題組『漢鏡文化研究』上冊 北京大学出版社 四月

●監訳 趙海洲著『中国古代車馬の考古学的研究』

科学出版社 東京 九月

河北省定州北魏石函出土遺物再研究 (共著)

考古学集刊 一九集 十二月

小川 佐和子

小津安二郎とメアリー・マクラレン

映画論叢 三七号 十一月

日本の映画理論 大浦康介編『日本の文学理論』

明文舎 三月

小野 容照

朝鮮における野球の受容—朝鮮で「ベースボール」は如何にして「野球」になったのか 山本浄邦編『韓流・日流—東アジア文化交流の時代』 勉誠出版 四月

植民地朝鮮の甲子園大会—朝鮮地区予選の設立と朝鮮人の参加をめぐる 二十世紀研究 一五号 十二月

菊地 暁

『ボナベ島』管見—京都探検地理学会ボナベ島調査 (1941) の足跡をたどって— 慶応義塾大学出版会HP 四月

「あまちゃん」とアーカイブス—東日本大震災をめぐる多様な表象実践と民俗誌— 季刊民族学 一四八号 四月

中国大陸と水野清—「新しい歴史学」としての考古学とミソク学2— 慶応義塾大学出版会HP 七月

宮本常一と水野清—「新しい歴史学」としての考古学とミソク学3— 慶応義塾大学出版会HP 十月

●ライフヒストリーレポート選二〇一三 (編著)

京都大学民俗学研究会 十二月

『遠野物語』と人文研—内藤湖南旧蔵・初版本『遠野物語』を機縁として— 慶応義塾大学出版会HP 一月

●ライフヒストリーレポート選二〇一四 (編著)

京都大学民俗学研究会 一月

柳田民俗学と南方民俗学 kotoba 一九号 三月

●「民族研究講座」講義録 (共編)

神奈川大学国際常民文化研究機構 三月

書評 飯倉照平監修『南方熊楠英文論考』〔ノーツ・アンド・クエリーズ誌篇〕 熊楠研究 九号 三月

読者論（共著）大浦康介編『日本の文学理論—アンソロジー』（ベータ版） 京都大学人文科学研究所 三月

起源論・発生論（共著）大浦康介編『日本の文学理論—アンソロジー』（ベータ版） 京都大学人文科学研究所 三月

小池 郁子

社会運動を変容させる「女神」—オリシャとともに生きるアフリカ系アメリカ人 季刊民族学 特集女神 一四九号 七月

アフリカ系アメリカ人の社会運動にみる軍事的性格—暴力、男らしさ、黒人性 田中雅一編『軍隊の文化人類学』 風響社 二月

オリシャ崇拝と「性別」—アメリカ黒人の宗教運動の変容 宗教研究 八八卷 三月

小関 隆

●現代の起点 第一次世界大戦（全4巻）（共編著）

翻訳 ジェイ・ウィンター 破局を記念・追悼する—100年 岩波書店 四〇七月

後の第一次世界大戦 思想 一〇八六号 十月

解題 第四世代の第一次世界大戦研究とその先 思想 一〇八六号 十月

項目執筆 「二つの世界大戦とイギリス」「チャーチル」イ

ギリス文化事典編集委員会（編）『イギリス文化事典』

京大人文研共同研究班が読み解く世界史—第1次大戦から100年（3）徴兵制 京都新聞十二月二十日

瀬戸口 明久

空間を充たすテクノロジー 山室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦 二 総力戦』 岩波書店 五月

書評 平岡昭利『アホウドリと帝国日本の拡大』 社会経済史学 八〇巻一号 五月

書評 生命科学という物語 婦人之友 一〇八巻六号 六月

ハエを数え上げる 大阪市立自然史博物館編『都市の自然 2014：第45回特別展ネコと見つける都市の自然 解説書』 大阪市立自然史博物館 七月

科学に編み込まれて 人文 六一号 七月

書評 虚構の風景 婦人之友 一〇八巻九号 九月

書評 予定調和の世界 婦人之友 一〇八巻一二号 十二月

書評 過去が消え去るとき 婦人之友 一〇九巻三号 三月

京大人文研共同研究班が読み解く世界史 第1次大戦から100年 電信と電波 世界は一つに 京都新聞三月二十一日

高井 たかね

『金瓶梅』挿図に描かれた生活空間—テキストとの比較から 人文 六一号 六月

高木 博志

福留照尚先生の思い出 新修茨木市史年報 一〇号 三月
 伝統文化の創造と近代天皇制 吉田裕他編『岩波講座日本歴史』第一六卷 近現代二 岩波書店 六月

第一次世界大戦前後の日本の文化財保護と伝統文化 岡田暁生他編『現代の起点 第一次世界大戦 三 精神の変容』 岩波書店 六月

古都の近代と京都のイメージ 『うるしの近代—京都、「工芸」前夜から』 京都国立近代美術館 七月

裏読み 秋の観光ガイド（京都編） 時代映す宇治のイメージ 毎日新聞 九月二十五日

第一次世界大戦と日本の文化財保護—現地保存の思想は、現代の課題である 図書新聞 三一七八号 十月四日

奈良女子高等師範学校と小倉遊亀 『遊亀と靱彦—師からのたもの・受け継がれた美』滋賀県立近代美術館 十月

●鉄道がつくった日本の近代（共編著） 成山堂書店 十一月
 向日町と昭和初期の文化 『特別展 昭和の向日町と文人』向日市立図書館・向日市文化資料館開館三〇周年記念展示 十一月

飛鳥井雅道先生と天皇制研究 日本歴史 八〇〇号 一月
 名所の桜・御苑の桜

京都御苑ニュース 国立公園協会京都御苑 三月一日
 御廟野古墳立ち入り観察に参加して 市民に開かれた天皇陵に 京都新聞 三月二十四日

Where do our images of Kyoto and Japan come from?

Kyoto University Research Activities Vol.4 No.3 三月

桜 板垣竜太ほか編『東アジアの記憶の場』（ハングル版） サムイン社（ソウル） 三月

高階 絵里加

第一次世界大戦と日本の西洋美術コレクション 岡田暁生他編『現代の起点 第一次世界大戦 三 精神の変容』 岩波書店 六月

美術のなかの裸体美—西洋から日本へ— 乳房文化研究会編『乳房の文化論』 淡交社 一月

展覧会 日本経済新聞（夕刊）
 四月一日、四月二二日、五月二七日、六月一七日、七月八日、七月二九日、八月一九日、九月九日、十月二八日、十一月一八日、十二月九日、一月二三日、二月三日、二月二四日、三月一七日

竹沢 泰子

●Introduction: Toward a more globalized anthropology of race: some implications from “invisible races” in East Asia. *Engaging Race and Racism in the New Millennium: Exploring Visibilities and Invisibilities*, IUAFS (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 五月
 Human Genetic Research, Race, Ethnicity and the Labeling of Populations: Recommendations based on an in-

terdisciplinary workshop in Japan. Yasuko TAKEZAWA, et al. *BMC Medical Ethics* 15 (33), BioMed Central

ヘンリー・ミヤタケさんと日米戦争 人文 六一号 六月

一方向から双方向の「多文化共生」へ 四月

趣旨(特集…中等教育でまなぶ「人種」「民族」とヒトの多様性) ひょうご人権ジャーナル きずな 七月

創られた「人種」 学術の動向 七月

「多文化共生」を未来につなぐために『つどい報告書』阪神学術の動向 七月

淡路震災二十年・多文化共生をめざして『』 三月

●人種研究の日本型グローバル研究 科研費成果報告書 三月

武田 時昌

伝統医療の文化多様性を探る 医道の日本 八四七号 四月

辟穀と木食―東洋的断食療法の源流 医道の日本 八四八号 五月

翻訳 岳麓書院藏秦簡『数』訳注稿(六) 医道の日本 二一七号 六月

採葉記念日としての端午の節句 大阪産業大学論集 人文・社会科学編 八四九号 六月

人体解剖を行った鍼医、整骨医 医道の日本 八五〇号 七月

元気になる医師―中神琴溪の元氣論 医道の日本 八五一号 八月

モリエール喜劇の医者批判―「病は気から」論(一) 医道の日本 八五二号 九月

翻訳『九章算術』訳注稿(一五)(共訳) 大阪産業大学論集 人文・社会科学編 二二一十号 十月

白隠流養養術の系譜―「病は気から」論(二) 医道の日本 八五三号 十月

Deng 熱・恙虫病と沙蟲病―風土病のグローバル化に思う 医道の日本 八五四号 十一月

医学概論のなかの漢方医学―澤瀉久敬の先見的試み 医道の日本 八五五号 十二月

医卜と精誠―大医になる道 医道の日本 八五六号 一月

翻訳『九章算術』訳注稿(二六)(共訳) 大阪産業大学論集 人文・社会科学編 二二三号 二月

医は意なり―名医の条件 医道の日本 八五七号 二月

ポルトガル貿易商の外科手術―南蛮医師の伝承者(一) 医道の日本 八五八号 三月

田中 雅一

●軍事環境問題ワーキングペーパー4 国際ワークショップ 韓国における軍事基地と反基地・平和運動の現状(共編) 二〇一四年三月

●Contact Zone (コンタクト・ゾーン) 六号 人間・環境学研究科 四月

「やつとホントの顔を見せてくれたね!」日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について

Contact Zone (コンタクト・ゾーン) 六号

人間・環境学研究科 四月

コラム 武器をアートにする 山室信一他編『現代の起点

第一次世界大戦 三 精神の変容』 岩波書店 六月

●季刊民族学 一四九号 女神(企画・編集)

千里財団 七月

女神の世界へ 季刊民族学 一四九号 七月

項目執筆 コンタクト・ゾーン、セックスワーカー、女性への暴力 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 丸善出版 七月

●軍隊の文化人類学(編)

序章・軍隊の文化人類学のために 田中雅一編『軍隊の文化

人類学』 風響社 二月

軍隊・性暴力・売春——復帰前後の沖縄を中心に 田中雅一

編『軍隊の文化人類学』 風響社 二月

翻訳 アーロン・スキヤブランド「愛される自衛隊」になる

ために——戦後日本社会への受容に向けて(共訳) 田中雅

一編『軍隊の文化人類学』 風響社 二月

スリランカの民族紛争と宗教—ソーシヤル・キャピタル論の

視点から 櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編『現代宗教文

化研究叢書 五 アジアの社会参加仏教—政教関係の視座

から』 北海道大学出版会 三月

縛りからシバリへ—もうひとつのクールジャパン 佐藤知

久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手触り』

ナカニシヤ出版 三月

からだを美しく狂わせる方法—カーヴァーの身体加工につ

いて エステティーク二号 日本美学研究所 三月

クールなエロティック・ジャパン 週刊読書人増刊号 *Ponto*

特集・欲望のかたち 二号 三月

田中 祐理子

Homo sum: Humani nil a me alienum puto: Epistemologi-

cal Philosophy Questions Human Activities That Give

Birth to Scientific Knowledge *Kyoto University Re-*

search Activities 4(1) 六月

科学と「信じられない事柄」

現代思想 四二巻十二号 七月

トピックス—受賞の言葉

表象文化論学会ニューズレター *REPRE* 二二号 十月

平和主義の哲学は「現実性」を持つことができるか—戦間期

を生きた哲学者達の問いを追いかける

図書新聞 十一月二二日

立木 康介

『沈黙と響きⅡ』あとがき 三好暁光『沈黙と響きⅡ 心の

病と創造への道』 創元社 五月

Amour en anamorphose — l'amour courtois et l'amour

fou. II *PSYCHANALYSE* 30 五月

集団性の脈動、トラウマの衝迫—精神分析からみた第一次世

界大戦と心的生の変容 山室信一他編『第一次世界大戦

三 精神の変容

岩波書店 六月

活人画の子

京都大学新聞（「複眼時評」） 七月一日

反戦の女（リレーエッセイ「第一次世界大戦を考える」）

図書新聞三一八五号 十一月二九日

翻訳 ピエール・ブリュノ「症状、主体の分裂、資本主義の

デイスクール」

思想 一〇八七号 一月

マルクスに回帰するラカン（一九六六・七二）

思想 一〇八七号 一月

土 口 史 記

戦国・秦代の嵬——以嵬廷和「官」的関係为中心的考察（朱騰

訳）周東平・朱騰主編『法律史訳評』二〇一三年巻

中国政法大学出版社 十一月

Relaying and Copying Documents in the Warring States,

Qin, and Han Periods. Nagata Tomoyuki (ed.) *Docu-*

ments and Writing Materials in East Asia. Institute for

Research in Humanities, Kyoto University. 十二月

項目執筆 舍・尚韋（常韋）・勝負・桀櫟（桀櫟）・壽・万騎

太守 富谷至編『漢簡語彙考証』 岩波書店 一月

木札が行政文書となるとき——木簡文書のオーソライズ——京

都大学人文科学研究所附属東アジア人情報学研究センタ

ー編『木簡と中国古代』 研文出版 二月

里耶秦簡にみる秦代嵬下の官制構造

東洋史研究 七三巻四号 三月

富 谷 至

●東アジアの死刑（韓国語版） 韓国嶺南大学出版会 十月

●*Crime and Morality in East Asia, Symposium Organized*

by Institute for Sinology and East Asian Studies, Uni-

versity of Muenster and Institute for Research in Hu-

manities, Kyoto University. 十一月

The Conception of Fornication — From The Han Code to

The Tang Code. 『中国古代法律文献研究』第八輯（中国

政法大学法律古籍研究所） 社会科学文献出版社 十二月

Stone Inscriptions in ancient China — Their origin and

Evolution from the Shang to Han Times. Tomoyuki

Nagata: *Documents and Writing materials in east China*

(Occasional Research Reports of International Oriental

Studies No. 1) 一月

中国西北出土木簡概説 京都大学人文科学研究所附属東アジ

ア人情報学研究センター編『木簡と中国古代』 研文出版 二月

●漢簡語彙——中国古代木簡辞典 岩波書店 三月

●漢簡語彙考証 岩波書店 三月

永 田 知 之

『唐詩類選』雑考——類書と唐人選唐詩—— 東方学研究論集刊

行会編『高田時雄教授退職記念東方学研究論集』〔日英文

分冊〕 東方学研究論集刊行会 六月

●*Documents and Writing materials in East Asia*. Tomoyuki

Nagata (ed.) Institute for Research in Humanities,
Kyoto University 十二月

Wenhang Xijun 文場秀句 and Guang Wuyunlu 広五運図

A Textbook the Heir Apparent Used during the Tang
Period. Tomoyuki Nagata (ed.) *Documents and Writing
materials in East Asia*. Institute for Research in Hu-
manities, Kyoto University. 十二月

『文場秀句』補説—『敦煌秘笈』羽072と『和漢朗詠集私
注』 敦煌写本研究年報 九号 三月

●唐代の文学理論—「復古」と「創新」

京都大学学術出版会 三月

中国文学理論の日本への影響 大浦康介編『日本の文学理論
—アンソロジー(ベータ版)』 京都大学人文科学研究所 三月

藤井俊之

解題 ゲルハルト・ヒルシュフェルト「ドイツにおける大戦
の記憶」 思想 一〇八六号 十月

翻訳(藤原辰史と共訳) ゲルハルト・ヒルシュフェルト
「ドイツにおける大戦の記憶」 思想 一〇八六号 十月

藤原辰史

●現代の起点 第一次世界大戦 全四卷(共編著) 四—七月
総説『現代の起点 第一次世界大戦 二 総力戦』 岩波書店 五月

食糧生産を支える女性たち—「農村婦人」の動員『現代の起
点 第一次世界大戦 二 総力戦』 岩波書店 五月

自然と環境 木村靖二他編『ドイツ史研究入門』

山川出版社 五月

歴史的課題としての食—コメントにかえて

民衆史研究 八七号 五月

掃除のおじさん

人文 六一号 六月

暴力の行方—革命、義勇軍、ナチズムのはざままで『現代の起
点 第一次世界大戦 四 遺産』 岩波書店 七月

経済ジェノサイドと集団的自衛権

京都新聞(夕刊) 八月六日

山師と流言—伊藤永之介論序説 文学史を読みかえる・論集
二号 インパクト出版会 八月

Ernhofesetz in Manchukuo: a case study of the accep-
tance of Nazi agricultural ideology by the Japanese
Empire, in: L. Fernández Prieto, J. Pan-Montojo, M.
Cabo (eds.), *Agriculture in the Age of Fascism*, Brepols,
Turnhout. 八月

The Kitchen: A Historical Record, *Research Activities*, 4-2

九月

History of Recipes.

楽友 二六号 九月

ほんと人間って 京都新聞(夕刊) 十月二日

大戦の記憶の肉体的性とその同時代的展開

思想 一〇八六号 十月
京大人文研共同研究班が読み解く世界史 第1次大戦から100

年模範国ドイツの惨状に衝撃

京都新聞(朝刊) 十一月十五日

共に食べ、共に考える みんなのミシマガジン 十一月

レンタサイクルを用いた史料収集に関する考察

理 四十一号 十一月

卒業論文の効用 京都新聞(夕刊) 十二月三日

2014年下半年読者アンケート

図書新聞 十二月二十日号

時代にあらがう言葉を紡ぐ リレーエッセイ 第一次世界大

戦を考える(48) 最終回 図書新聞 十二月二十日号

無料食堂試論

ARDEC: World Agriculture Now 五一号 十二月

台所の設計史

武庫川女子大学生活美学研究所紀要 二十四号 十一月

オレンジ色の記憶 京都新聞(夕刊) 二月二十一日

「イカの踊り食い」体験 朝日新聞(夕刊) 三月十五日

翻訳 ゲルハルト・ヒルシユフェルト「ドイツにおける大戦

の記憶」(共訳) 思想 一〇八六号 十月

●翻訳 フランク・ユークェッター『ドイツ環境史—エコロジー

時代への途上で』(共訳) 昭和堂 十月

船山 徹

梁の武帝—菩薩になったかった皇帝 真宗文化 二二三 八月

従六朝仏典の漢訳と編輯看仏教中国化問題

東亜仏教研究(2) 宗教文化出版社 北京 八月

『梵網経』の初期の形態をめぐって

東アジア仏教研究 一二二 九月

梁代の仏教—学術としての二三の特徴 小南一郎編『学問の

かたち—もう一つの中国思想史』 汲古書院 九月

長耳三蔵と『耶舎伝』—ナレーンドラヤシャスとの関わり

仏教史学研究 五六—二 八月

Chinese translations of *pratyakṣa*. Chen-kuo Lin and Mi-

chael Radich (eds.), *A Distant Mirror: Articulating In-*

dic Ideas in Sixth and Seventh Century Chinese Bud-

dhism. Hamburg University Press. 十二月

A Reexamination of the procedures for translating Bud-

dhist texts into Chinese as recorded in "Sutra-translat-

ing ritual" in the *Fo-tsu tung-chi* 43, *Transactions of*

the international conference of eastern studies 59 (The

Toho gakkai). 十二月

牧田諦亮著作集第二卷 中国仏教史研究(編集・解題)

臨川書店 一月

仏典漢訳の分業体制—天息災「訳経儀式」の再検討 新川登

亀男編『仏教文明の転回と表現』 勉誠出版 三月

中国仏教の經典読誦法—転読と梵唄はインド伝来か 村上忠

良編『宗教実践における声と文字—東南アジア地域からの

展望』 三月

The *Fanwang jing* (Scripture of Brahma's Net) in the

First Edition of the Korean Canon: A Preliminary Sur-

vey, *Zinbun* 45. 三月

ホルカ・イリナ

欧米における私小説研究 大浦康介編『日本の文学理論』

明文舎 三月

宮 紀子

江戸時代に出土した博多聖福寺の銀錠について『高田時雄教授退職記念東方学研究論集』

臨川書店 六月

ジャイル朝スルタン・アフマドの金宝令旨より 杉山正明編『続・ユーラシアの東西を眺める』

京都大学大学院文学研究科 六月

モンゴル王族と漢児の技術主義集団 小南一郎編『学問の私たち—もう一つの中国思想史』

汲古書院 八月

宮 宅 潔

書評 石岡浩著「秦漢代の徒隸と司寇—官署に隷属する有職刑徒」 法制史研究六三 二〇一四年三月

項目執筆 角ほか 富谷至編『漢簡語彙考証』

京都大学人文科学研究所 一月

村 上 衛

書評 古田和子編著『中国の市場秩序—17世紀から20世紀前半を中心に』 歴史と経済 二二三号 四月

書評 岡本隆司編『中国経済史』 洛北史学 一六号 六月
Trade and Crisis: China's Hinterlands in the Eighteenth Century. Tsukasa Mizushima, et al. (eds.) *Hinterlands*

and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century. Brill. 十一月

守 岡 知 彦

●A Morphological Analysis of Classical Chinese Texts. (共著) DH 2014. 七月

古漢字データベースの要件に関する試論

情処研報 Vol. 2014-CH-103, No. 5 七月

Digitization of catalogue of Oracle Bones. *JADH* 2014. 九月

古典中国語形態素解析による地名の自動抽出(共著) じんもんこん2014論文集 情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2014, No. 3 十二月

CHISEにおける漢文字体・字形粒度の整理規準について

東洋学へのコンピュータ利用 第26回研究セミナー 三月

矢 木 毅

朝鮮時代における三司の言論と官人の処罰

東方学報 八九 十二月

●韓国史の系譜(『韓国・朝鮮史の系譜』韓国語版) 笑臥堂 一月

安 岡 孝 一

Bitcoin は計算量理論から見て「無限連鎖講」である

日経 ITpro 四月二日

タイプライターに魅せられた男たち…ジエームズ・デンスモア
三省堂ワードワイズ・ウェブ

四月三日、一〇日、一七日、二四日、五月一日、八日、
一五日、二二日、二九日

イベントレポート「東洋学へのコンピュータ利用」第二五回
研究セミナー 人文情報学月報 第三三号 四月二九日
タイプライターに魅せられた男たち…フランク・クサファ
ー・ワグナー
三省堂ワードワイズ・ウェブ

六月五日、一二日、一九日、二六日、七月三日、一〇日、
一七日、二四日、三一日、八月七日、二二日、二八日

行政情報処理用漢字コードの現状

日経 ITpro 六月三〇日、七月一日、二日、三日、四日
A Morphological Analysis of Classical Chinese Texts.
Digital Humanities 2014 七月一日

社会保障・税番号制度の地方自治体における準備と課題

自由と正義 第六五巻第九号 九月

【Xmas】か【Xmas】か

人文情報学月報 第三九号 十月二八日
タイプライターに魅せられた男たち…山下芳太郎
三省堂ワードワイズ・ウェブ

九月四日、一一日、一八日、二五日、十月二日、九日、
一六日、二三日、三〇日、十一月六日、一三日、二〇日、
二七日、十二月四日、一一日、一八日、二五日、一月八
日、一五日、二二日、二九日、二月五日、一二日、一九

日、二六日、三月五日、一二日、一九日、二六日

人名用漢字の新字旧字…「巫」は常用平易か(続編)

三省堂ワードワイズ・ウェブ

十二月四日、五日、八日、九日、一〇日、一一日
人名と漢字 HUMAN 第七巻 十二月

古典中国語形態素解析による地名の自動抽出

人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2
014」論文集 十二月

入国管理局正字とその問題点 東洋学へのコンピュータ利用
第二六回研究セミナー 三月二〇日

山室 信一

シリーズ総説 世界戦争への道、そして「現代」の胎動 山
室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦 一 世界戦
争』 岩波書店 四月

書評『稀代のジャーナリスト―徳富蘇峰』

熊本日新聞 四月一三日

本質に迫った日本人―第一次世界大戦研究

毎日新聞(夕刊) 四月二八日

限定容認の無限定 現代のことば

京都新聞(夕刊) 四月二八日

可能性としての「日本」

アステイオン 八〇号 五月

総力戦―都市空襲 ぶんかのミカタ

毎日新聞(夕刊) 五月二九日

第一次世界大戦一〇〇年の意味

読売新聞 六月七日

憲法は無法なり 現代のことば

京都新聞 (夕刊) 六月三〇日

戦後の遺産、一手で壊す

京都新聞 七月四日

第一次世界大戦の衝撃と科学動員

學士會会報 九〇七号 七月

世界認識の転換と「世界内戦」の到来 山室信一他編『現代

の起点 第一次世界大戦 四 遺産』 岩波書店 七月

シリーズ総括 世界性・総体性・現代性をめぐって―振り返

る明日へ 山室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦

四 遺産』 岩波書店 七月

思想連鎖のなかの「人の支配」と立憲主義

法律時報 一〇七五号 七月

現代の起点としての第一次世界大戦

歴史地理教育 八二一号 七月

日本法学、その成果と可能性

明治学院大学法律科学研究所年報 第三〇号 七月

世界大戦が生んだ現代―宣伝と消費そして文化

政経特報・西日本新聞社 一四三四号 八月

記憶と忘却 現代のことば 京都新聞 (夕刊) 八月二二日

問いへの執着、醗酵への時間 図書 七八七号 九月

今、平和を語る 毎日新聞 (夕刊) 九月二九日

新秩序への模索『東アジア近現代通史・19世紀から現在まで

(上)』 岩波書店 九月

共同討議―和解と協力の未来へ『東アジア近現代通史・19世

紀から現在まで (下)』 岩波書店 九月

もう一つの世界性―第一次大戦と非戦思想の連鎖

思想 一〇八六号 一〇月

東アジア史における第一次世界大戦―日本からの眼差し

思想 一〇八六号 一〇月

見解の相違 現代のことば

京都新聞 (夕刊) 一〇月一七日

絶望と希望 現代のことば 京都新聞 (夕刊) 一二月一六日

第一次世界大戦をとらえ直す

日本経済新聞 (夕刊) 一二月二日

鼎談・昭和から何を学ぶか

京都新聞 一月三日

第一次世界大戦と現代・世界 読売新聞 一月一九日

自由と壁 現代のことば 京都新聞 (夕刊) 二月二五日

人

文

第六二号

二〇一五年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品